●相切れ候とも御斷無之間は依然發送致すべく候間爲念申添候也●

第四百六十一號目次

◎口繪
哀別離苦の圖（說明四百五十九號在）
普佛戰爭紀念碑面の彫刻

◎社說
小學卒業後の女子
今時の男子

◎家庭
堅固なる家政
器物の取扱方及び掃除

◎史談
男女交友の鑑聖女ポーラ　　曲浦

◎講義
植木盆石の話　　井華

◎文藝
杜律釋義　　松城

◎問答
女の有無能に大家の見習

◎雜錄
江戶の華（一）
怪賊靜馬の話（下）
故小此木秀野君の絕筆小說（つゞき）　　八木文剛述
仁君の名青に歎くづ（ちやうてい）

◎時文
福澤先生浮世談◎新小說第三卷第三號

◎片々◎時報

社告

◎本誌は每月二回即ち十日、二十五日の兩日を以て發行す

◎十日發行の分は稍や簡易實際を事にし、第一、家庭の整理改善に益ある事項を主として、其他、文藝、史傳、問答等の諸欄に重きを置き、二十五日發行の分は、女學教界に對する吾黨多年の主義を發表するもの。

◎單に十日發行の分のみを購求せんと所望せらるものあらば其望に應ずべし

●女學雜誌定價表●

前金	壹冊定價	金拾錢
	半年前金	金壹圓拾錢
	一年前金	金貳圓
	（內國無郵稅）	
	代金は凡べて前金の事◎前金切れ候とも御斷無之間は引續き發送するとも可有之	
廣告料	一行一回（廿七字詰）	前金拾錢
	同　三回以上	一割引
	同　六回以上	二割引
送金	爲替は東京本郷駒込郵便支局に宛て小爲替にすへし〇郵便切手にて送る人は五厘切手にて且つ一割增を添ふべし	

明治廿七年二月十九日內務省許可
明治三十一年三月十四日印刷
明治三十一年三月十五日發行

東京府北豐島郡巣鴨村字庚申塚六百六十番地
發行兼編輯者　巖本善治
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十六番地
印刷者　島保藏
東京府北豐島郡巣鴨村字庚申塚二百四十六番地
發行所　女學雜誌社
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所　株式會社秀英舍第一工場
（電話本局十九番）

社告

櫻井成明譯　**腓立比物語**　正價金二十八錢　郵稅金六錢

橫山雅男著　**婚姻論**　正價金十二錢　郵稅金四錢

若松賤子譯　**小公子**　正價金三十五錢　郵稅金八錢

若松賤子英文集　**巖本嘉志子**　正價金六十錢　郵稅金六錢

布川靜淵、故小此木秀野合著　**俳諧史傳**　正價金二十七錢　郵稅金四錢

故鈴木弘恭述　**百人一首講義**　正價金二十八錢　郵稅金四錢

同　**文法口授**　正價金十二錢　郵稅金二錢

●前號要目●（二月廿五日發行第四百六十號）

●支那人果して保守か●師弟微妙の感應●日本全國基督新教派女學校現在表●裸躰畫の可否論●青柳有美の裸躰畫賛論の一節●當今の學風、空疎淺薄に非ずや●衰將教育の統計其他●隨感孔夫子、豐太閤◎湖南の弔文◎中江兆民氏の檄●楚些錄祭故巖本嘉志子君文◎寄雪懷舊●婦女の凌辱●芳野山◎天地の戀◎各地方の手翰獻

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

[illegible]

時 [illegible] 定 [illegible]

[illegible] 日 [illegible] 行 [illegible]

東京市 [illegible] 一丁目 [illegible] 番地

發行者 [illegible]

印刷者 [illegible] 島 [illegible]

發行所 [illegible] 雜誌社

東京市 [illegible] 一丁目 [illegible] 番地

[illegible]

◎同號 [illegible]

◎支那人果して保守的か ◎ [illegible] 的の [illegible]

[illegible] ◎日本帝國果して [illegible] 女 [illegible]

在來◎裸體 [illegible] の可否論◎ [illegible] 詩的

裸體 [illegible] 一節◎ [illegible] 今の學風、空

東京商に非ずや◎ [illegible] の [illegible]

[illegible] ◎ [illegible] 錄 [illegible]

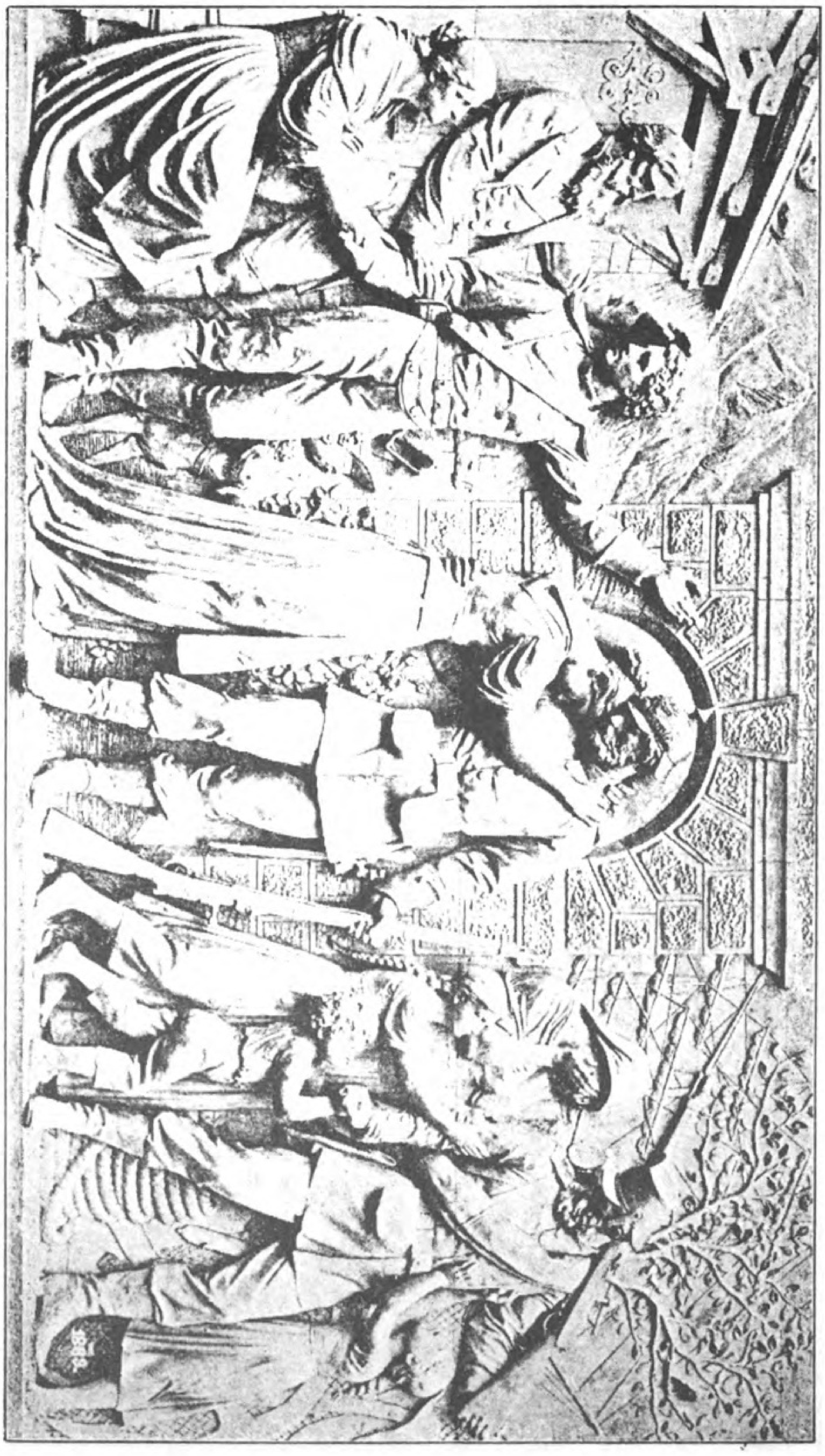
◎婦女の凌 [illegible] ◎ [illegible]

[illegible] 史 [illegible]

白人 [illegible]

な [illegible] 日 [illegible]

[illegible]



Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌

第四百六拾一號

明治三十一年
三月十四日發兌

社説

小學卒業後の女子

女子敎育衰へたりなど言ふ人も折々はあれど、事理を辨へぬ空論なり。何れの家の親か、其の娘を愛せざるものある。愛して而して之を敎へんとせざるものは、親の慈悲として有るまじき事なり。經濟の許す限り、見識の見込次第、夫れ相應の躾を施して、少しなりとも我娘を立派にせんとするは、なべての親の人情なり。野蠻人の中には、娘が素裸にて外出するを奇しとせざるものもあれど、其社會の女のたしなみとして用ゐる胡粉を塗らずして、他に見らるるヿを氣にするなるべし。臀の大きくして、繩にたよりて立上るほどなるを美人とする好みの仲間にも、鼻の下に入れ墨して貞操を見めし、足を小さくして可憐の運歩を上品とする國民迄で、夫れ相應のたしなみはあり。即はち是れ女の躾、女の敎育の行はるゝ概略にして、如何に異様の風習の下にも、娘を美しくせんとの苦心はこもれり。何の時、何の家か、はた全然、女子敎育なきの世あらんや。

左れば、女子敎育の盛衰と言ふは、或る躾方より他の躾方に移りゆく渡し場の遠近上り下りを言ふヿなり。全たく、敎育の正味の興亡を言ふにはあらず。女學校より娘を下げて、お針の稽古のみをさせるは、女子敎育の衰へたると言はんよりも、敎育法の變れると言はん。何故に變へたるかと問はば世の大抵の親々は、當代の流行、世上の評判が此の方に向へるやうなればと答ふるなるべし。好みに外るれば賣れ口遠しと心配するは當然にて、娘を持てる親の心は、高し低し、眞實は大牢ね此の存念に外なし。左れば、女學校より下げてお針、茶、花などにのみ勉強さする親を不都合とするに先だち先づは、斯る女を理想とする社會の男子を責むべし。男子の

理想上品ならざれば、親々の娘の躾方は、自づと下品になるべし。

然し乍ら、小商人は、今日明日の流行にのみ注意して、只だ少し斗りの仕入れをすれど、問屋、大商人は、少くとも、二三年後の事を思惑するなるべし。娘を持てる親は、當年の娘を當年賣り付けて、扨て其後の落付は如何やうにても佳しと云ふにはあらざるべし。先づ、十四五才の娘に、小學校卒業後の躾を爲さんとする時には、短かくとも二三年間の教育を施さんと目ろむなるべし。即はち、二三年後　賣り方の事なり。左れば、少なくとも、二三年後の世の流行は如何ならんと云ふと丈けにても、思案せざる可らず。之れ既に目前の事にあらず　扨て、二三年後に初めて賣り付けたりとも、當座は若夫婦の常態とて夢の生涯なり。四年五年と立つ中まで、よく〳〵世の趣きにも違はず、主人の需要にも適するやうなくてはならず　和熟の鎹ともなるべき若見を擧て、母となりて相應しき程のものとなる迄は、親の心配は一肩も下りるとなし。左れは、十四五才の娘を持ちたる親の心には、少くとも六七年後の事迄は一大掛念にて、預かじめ其邊の思案なかる可らず。口早く言へば、世の流行に從ふと言ふなれど、間違なく世の流行に從ふと云ふとの容易ならぬは、之によりて知らるべし。

左れば、なまじひに一時、一年の暫時の流行に從はんとせず、今日文明の世の風となりては、文明相應に、女子必要の學問を授け、其品を好くし、其操を固くし、在來普通の女のたしなみを教ふると共もに、文明の妻とし、文明の母とし、文明の交際として、普通に知り居らねば成るまじき丈けの事を教へ置くべし。左すれば、今後、一時の反動によりて女風に幾分の變化ありとも斯る娘の困却するとはあるまじきなり。即はち、娘に當世流行の衣服をのみ持たせて、嫁入らせず、不斷着も、禮服も、洋服も、一と通りは用意させ置くべしとの主意なり。

况してや、曾て本誌上にも論述せる如く、近年、高等女學校の隆盛は又意外の事ゆゑ、凡そ小學校卒業ほどの娘が大抵一と度び此校を通過して、一種の學校風を普遍に感染したると今日の如く廣く且つ盛んなるに至れば、此後、女風は必らず一變し、高等女學校卒業位の資格は、是非とも嫁入に必要な

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

ることなるべし。之れ、大抵の男子が皆な中學校を經過することなるに對したる相應の結果なり。男女は兩々相伴ふもの也。暫時、あと先きすとも、到底は相提携す。將來中等以上の女生は、何れも一度は高等女學校程度のものを卒業せざれば、甚だ通りの惡るきものとなる可し。

今時の男子

圓朝子が講談に、鹽原多助は、身貧賤にして天秤棒を擔ぐ小商人の比、物持の主人が其娘を呉れんとするを冷笑し、アンタ樣は、えらい慾の深い人ヂヤと言ひしとぞ。其意、我程の人物に娘を嫁がせて、後の出世を望むかとの痛罵なり。尻切半天に二文三文の商賣する男子にも、此の氣慨ありてこそ、天を撲つの大事業は成るべし。

然るに何ぞや、今の書生界、滔々たる流行の如何程迄に卑屈なるや。既に學士などの肩書を有するもの迄で、妻を擇ぶに持參金を當にし、若くは其緣邊によつて出世の緒をたどる。所云る閨閥の流行は、藩閥に次いでの流行なり。堂々たる男子、カカアのお流れにて顯達を望むとは、如何にも見下げ果てたる根性なり。

去る比、或る流行つ子の軍人が婚姻の招待狀に、何々銀行支配人娘誰子と約束相調ひ云々の書面あり。吾人は嘔つく斗りに感じて、臨席を謝絶したり。今の軍人にして斯の如し。學士など云ふものにして彼の如し。一世の男子、腰の骨を何時拔きしや。

夫も亦た夫人本人の智德の內助によつて事業を爲すなど言はば、別に妙味もあるべし。其の緣戚のお蔭にて出世すとは何事ぞや。今の女子たるもの、如此き男子の候補あらば、須らく謝絶すべし。たとひ、一時に時めくとも、不時の出世なり遠からず、滑り落つべし。女子もし選む所あらば、當に大丈夫を擇むべし。

凡そ「女子は學問なくとも善し、美にして富み、優にして屈服して呉れば可し」など言ひ囃すは、大抵、斯る男子の製造する輿論なり。渠等、目上に腰を折る、切めては家內にて威張らんとする幇間の所望と相似たり。斯る男子に支配せられて、女風の流行を左右せしめ、可なりとする乎。

家庭

堅固の家政

◎氷川の先生が、今時の紳商を評して『紙片もち』と言はれたは、至極の適評と思はれる。今の物持の財産と云へば、大抵株券であるが、株券の價格なるものは殆んど空相場の如きもので、決して當にすることが出來ぬ。百圓拂込の株も、利益配當が多ければ二百圓となる。甚た結構の話のやうであるが夫が即はち賴みにならぬ證據である。一朝、配當が減るか、もしくは全然、無配當にでもならうものなれば、價格は乍ち半分にも四半分にもなる。其上、拂込みの催促でもあるとすれば、尚更ら下る。殆んど、財産として賴みにすべきものでないが、今の風習では誰も之を奇しとするものも無い。然し世は追々六かしくなり、到底一大變化を免かれぬ世の中となつたれば、深く用心をせぬと、昔し御一新の時に出會たと同じ不幸にあふものが多からうと思はれる。

◎御一新の時にも『株』と云ふものを持つて大層の生計を爲て居たものが多くあつた。夫が一朝の變化で路頭に迷ふやうになつたものが澤山ある。然し、アノ株は、今の株と違ふなど云ふ人が多くあらうが、夫が迷ひと言ふものである。よく實相を考へて見れば同じことである。既に株券と云ふ文字を用ひ初めたるも、最初は、昔しの株に緣ませたものであるが今では反つて夫を忘れて仕舞ふたのである。

◎どうせ、今の諸會社も、大抵は無配當のやうな事になる。固より堅いのも隨分あらうが、取引上互ひに關係して居るから、傍杖を免かるゝことが、出來まい。配當が無くなり、株が下り、其上は、資本が少ないからだと云ふ說も出て、拂込をさせる、株主が彌よ窮して彌よ株が下る比、知らぬ間に外國の資本家の手に入つて仕舞ふと云ふのであらう。悲しい哉、我が日本人の損をすることが、此後は隨分多からうと思はれる此の變化の間を凌ぎ切れぬ人々は、中々の苦しい目に會ふことであらう。

◎凡そ、富家大家と云ふほどの家で、身代を確乎にしようと思ふものは、株券などはあまり多く持たぬが宜しい。夫も、

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

一地方の公道ともなるべき鐵道の爲とか、又は其地方一般の利潤ともなり又細民の生計ともなるべき職業會社の爲とか云ふもので、申さば義捐をしても成り立たせなければならぬ程のものならば、之を全たく謝絶して、其の株を斷ると云ふことは不都合である。又、既に所有して居て、危いと知つて直ちに賣り放すなどは尤も宜しくない。斯樣なる會社ならば最初より慾氣を離れ、公共の爲と覺悟して、相應の株を持つが宜しい、加之、最後まで持續くるが宜しい。

◎苟くも、舊家大家となりたるものは、一地方の鎮臺をもて任じなければならぬ。自分より下の人々を相手にして、之と競爭するかの如き腹構にては、迚も其家格を維持することは出來ぬ。財は天下の共有物にて、決して一人の私しすべきもので無いから、若しも鄙吝なる私の考へで之を所有しようとすれば、不思議なる哉、天は種々の手立をもつて之を散じて仕舞ふ。たとへば、其家に不運が續くとか、もしくは、其子が放蕩をするとか、又は、番頭に欺されるとか、泥棒が這入るとか謂ふ如きことが續々起つて、決して長持のするもので無い若し、此言を信ぜずば、試みに、眼を張つて四方を見るが宜しい。主人の心得が惡く、ケチで、公益を思はぬ家は、三代と家格を持續けたことは決して無い。

◎泥棒を防ぐには、庫を丈夫にする、火事を防ぐには、火の用心をすると云ふ丈けの心得は、小さな家の主人などが言ふことで、舊家名家の主人の言ふべきことでない。一朝時世の變化があれば、義賊に類したものが橫行する。よし、變化の時世で無くとも、大泥棒と云ふものは、大抵、義賊を理想にして居るものであるが、彼等が這入るのには、是非、心得方の惡るい、不評判な、無慈悲な大家を擇んでゆくものである。よしんば誤まつて、慈悲深い主人の大家に這入るとしても、四方の人々が之を氣の毒がつて、三年や五年は、入用の懸らぬやうに、懸らぬやうにして吳れるから、決して大きな穴の明くもので無い。之に反し、無慈悲の家に災難があらうものならば、人々拍手して之を喜ぶ、眞に善い氣味だと言ふ。左樣なれば、奉公人迄が安んじて勤めぬやうになる。之で家を固くしやうとは、どう言ふ考か、殆んど譯の分らぬことである。又、火災保險と云つて、家の火災を保險するには、隨分少なからぬ金を拂はねばならぬ。田舍の大家では、別に保險料と

云つて、會社に拂ふとも無いのであるから、其の心得で四方の貧民に配布するが宜しい。左すれば、自然に仁心も貫徹し火つけなども有るまいし、よし有つても、隨分消し止めるとが出來る。然るに、只だ但だケチで居て、內の火の廻りさへコキ遣へば夫で大丈夫だと心得るなどは、何と云ふ淺ましいとである乎。

◎出羽の本間と云ふ大家は、十万石以上もあらうと云ふ地面持であり乍ら、其地面は本間家所有の名になつては居ない相だ。大方、其の家來筋とも云ふべき多數の人々の所有となつて居るのであらうが、今日權利義務を八釜しく云ふ世の中で丸るで、維新前の殿さまが、地面を百姓に分配して居る工合で、毫も自己の所有とせず、而も今日の事ゆゑ、地券面迄で他人の者とさせて置いて毫も危ぶまないと云ふは、何たる有力の事であらう。其の德義上關係の勢力と云ふものが推測される。東海悅郎は、大詐僞師で、大臣より、本願寺の法主より、あらゆる紳商まで、大抵は欺した男であるが、曾て獄中で懲いて言ふた相な『迚も出羽の本間丈けは欺せない』と。何故かと聞いたらば、餘人は皆な慾があるから欺せる、本間斗りは慾が無いから欺せぬと言ふた相な。

◎右の土地所有權を人の名にして毫も危ぶまぬと云ふとから思ひ起すは、德川氏の時、天領と云つて收入の多いやうな地方を德川氏の直轄にして居つたが、夫を、アチラコチラの大名の領內に、ポツ〳〵と挾んで置いた。僅かに代官以下少數の役人を送つて置く斗りで、兵力はあるでなし、一朝德川氏の勢力德望が衰ふれば、其の總ての財源は一時に滅して仕舞ふと云ふ余ほど危險な仕組である。然し乍ら、其の危險と見ゆる仕組を善く活かして毫も差し支へなくするには、德川氏中央の仁政と云ふものが貫徹しなければならぬ。所云る死地に立つて生地を得るの工夫で達人が安全を斗るの道は何時でも此處である。本間家が、我が地所を皆な人の所有にして置ながら、夫で反つて善く調つて行くと云ふのは、中央の仁心が貫徹するからだ。若し其家の主人が心得が惡るければ、今度は本當に他の所有となつて仕舞ひ、本間家の當主は一町の田地も無いものになる。此の死地に置いて、初めて生地に立たせると云ふ工夫は、さすが本間家の家風を造つた英傑の卓識である。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

◎又思ひ出すは、三井家の事である。近頃では、家憲が變つた相であるが、一躰は、三井家七軒の子供は、丁稚と同じやうに店に出て、同じやうに番頭に使はれる。其中で尤も人物の善いのが撰擧されて、三井家の惣主人となる譯で、夫はホンノお役である。夫故、三井家の財産は、誰の私有にもつかぬもので、公有の姿であり、立派に撰擧法が行はれて、尤も賢明なるものが惣支配を仕たのであつた。近頃では、三井家も殆んど當世風の先鋒で、中々勢ひの善いやうに見えるが、家風の品格と云ふものは、丸で昔と違ふ。西村虎四郎君などと云ふ忠臣は、昔しの三井家にして初めて、持つことが出來るのである。

◎凡そ世の中の物に大した厚薄と云ふことは無い。暫時の間で見ると、甚しい不權衡があるやうに見えても、遠からず、平準にして仕舞ふものであるから、僥倖と云ふものも無ければ不仕合と云ふものも無い。因果は決して免れぬもので、免れぬから、當座の間、ひどい不仕合もあるやうに見えるのである。夫故、僥倖などと云ふものを決して當にすべきで無い。苦心しなければ夫丈けの報酬は無いものと云ふことを固く心得ねば成らぬ。

◎先づ金利の事で一例を擧れば、茲に金利の多いものがあれば、夫は夫丈け危險なので、決して僥倖とは言へぬ。危險と云へば即はち未だ我ものと爲了て居らぬ所が多くあるのであると心得ねば成らぬ。高利貸などが、莫大の利を占めるやうに見えるが、扨て能く計算して見れば知れたもので、決して夫の一事で永久の大家となることは出來ぬ。必らずや、他日、家の財産若干を義捐的に仕ひ棄てなければ、人の怨みと云ふものが消えぬ。つまり、尤も確乎たる財産は、尤も確乎なる金利の割で溜まつたのと同じことになるもので、差引すれば、結局の所は、少しづつの清財を貯蓄したと同格となるものである。

◎清財とは、清い財と云ふことで、之が至極肝腎なことだ。少しでも、無理をしたり、些さかでも、人の恨みの混つて居る金ならば清財と云へぬ。其の清くなつて居らぬ丈けは、必らずや、何時か、如何なるかの姿で消え失せて仕舞ふ。夫は實に争へぬものだ。

器物の取扱ひ方並に掃除

◎器物の扱ひ方には、家風あり、家法あり。先づ夫を善く聞き覺ゆべし。たゞ一概に我が心得を可とすべからず。

◎主婦の器物に於けるは、大將の兵士に於ける如し。各々其所を得させ、其用を盡させ、其地を守らせ、勝手に散亂せしめず、整然として隊伍部署に順從せしむるを要す。

◎當座の用につかはぬものが、出て居れば反つて邪魔となる而も毀れ易し。之は非役として、よく包み、表に名前を記し夫々の置場に貯はへ置くべし。

◎箒の使ひ方惡るければ長刀形になる。立かけても長刀形になる。横にねかして置くがよし。逆に立つるも可けれど、之は嫌ふ人もあるべし。使ひ頃の長さの柄にして、柄は少し上をあます程に格好よく持ち、長刀形にならぬやう。サキをあちらこちらに使つて掃く。箒は上等のを用ゐるを得とす。箒の早く損むやうなる使ひ方すれば、疊亦早く損む也。

◎ハタキは、毛、布、紙の三種あり。紙は薄美濃紙の八切を四つ折にしたるがよし。柄は總て籐が可し手に豆が出來ぬ。布は、白絹を用う、ゴミにならぬ。ハタキは總じて、先を當てはたく。障子などは、內よりはたく斗りでなく、又た外よりもすべし。雨戶も一二週に一度ははたくべし。天井は長柄のハタキにて掃ふ。掛物は外へ／＼とはたく。額は傍へ／＼とはたく。一週一度は、其裏もはたくべし。

◎漆器の汚れし所は、なまぬるき湯にて指の腹にて洗ひ、和かき布巾にてふき、羽二重などにて清ぶきす。藏めるにはキレ又は紙にて包む。又は綿を入るゝこともあり。隅にあたらぬ樣にして外箱に入れる。蒔繪の類は、殊に軟かきキレにて包むべし。漆器の臭氣を早く除かんには、米汁をぬるま湯にして數度そゝぐか、糠を中に入れるか、數日、米の中に埋めをくか、又は腐滓にて洗ふもよし。肉類の脂のつきたる時は青菜の葉にてしづ／＼と洗ふべし。

◎陶器又は硝子の器は、使用する先に、釜に水を入れ、藁又は食鹽を少し入れ、ぬる火にて徐々と煮るべし。丈夫になるなり。陶器に油脂のつきしは、紙にてふき取り、灰を入れ、湯をかけて洗ふべし。茶澁のつきたるは、灰汁にて徐々と煮て、其の灰汁にて洗ふべし。又、生灰を水に和し、藁のたは

い、又は布巾などにて洗ふもよし。硝子の器を長く使ひ、白黄色のしみ着くときは、鹽酸を薄く水に解き洗ふべし。乳汁を入れたる器は、少しの灰汁又はソーダを水に和して洗ふべし。

◎竈の銅壺は常に水を満たすやう用心すべし。灰はよく取るべし。竈布巾は別にし、木の所は水をつけて、其外は乾きたるまゝにて能く拭ふべし。

◎火鉢は仕舞ひ置ときは灰を出すべし。其儘にして置くも、來年は黄くなりて火の持ち悪るし。新に灰を入れる時、少し水をかけるといへど、よく乾かねば銅さびるべし。毎朝よく灰をふるひ、縁は軟かきキレにて乾きたるまゝ能く拭ひ、灰ふきは一度々々あけ、水少し入れ置くべし。

◎食器は殊に清潔にすべし。一月に一度は灰を入れて能く煮、ぐら〳〵煮て、熱き時に上るべし。

◎靴は其都度よく拭ひ、塗るべき時は墨を塗りて後ち藏めをき、出がけに手後れすべからず。之を疎畧にすれば、外見の悪しきのみか、持も悪るし。足駄は、鼻緒をぬらさぬやう、裏の結び目もぬらさぬやうに洗ふべし。疊附は軟きキレにて疊を拭き、台を洗ふべし。其時、緒は紙にて包み、汚れぬやうにすべし。

◎傘は紙張も絹張も、雨にあたりたる時は能く拭ひ、日に一寸あてゝ、後ち日かげに干すべし、竹にカビの出來ぬやうにすべし。袋には鬱金木綿をよしとす、ツヤを損せず、布も軟らかなれば也。日傘は使用したる度に、毛ばたきにて能く塵を拂ふべし。コウモリ傘は、新しき中より鄭寧にし、袋に入れて仕舞置くも可けれど、あまり筋のきれぬやうにすべし。ブラシにて洗ふは可きやうなれど、布の質こわくなる。

◎提灯は舊き丈けよし。持をよくして長く貯ふべし。不斷用と、善きものと、人に貸すとは別にすべし。三月目に一度は能く乾すべし。新らしきは紙の剝げるとあり、七年も立ちたるは、大暴風に持ちあるきても、剝げるとなし、手入れをよくすべし。箱に入れるか、紙にシブを引きて袋とし入れ置くべし。ホヤの心は毎日よく切る、心はあまり舊くなれば反つて油も損、光も悪るし。ホヤは、少し水つきても破裂すべし。火も初めは少し出し、温まりて後ち多く出すべし。行燈は毎日油皿をよく拭ひ、油を十分に入れ、燈心は多くすべからず。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

瓶はあまり長く元の儘まゝにして舊くす可らず、暗らくもあり又火の用心もあり。

◎飯櫃は、毎日一度づつ乾す。乾すには、一寸と日にあて、后ち陰干にす。洗ふには、初めタワシにて能く洗ひ、后ち磨き砂にてみがき、よく洗ひ、布巾にてふく。扨て乾して蓋を爲し、いよ〳〵飯をうつす時、下ぶきんにてふき移す。すべて、洗ひやう、乾しやう足らねは、惡しき臭あり。乾し方强ければ、乾割を生ず。

◎金盥口すゝぎなど、眞鍮ならば、磨き砂をキレにつけ拭くやうにして磨く。隅は楊子に磨砂をつけて洗ふ。磨きしのち能く拭わねば色づく。顏洗には、反つて角盥の方扱よし、タワシにて毎日ざつと洗ふ。

◎米櫃は、時々よく拂ひ、かげ干にすべし。米を上へ〳〵と入れず。前の殘りたると新らしきとを、澁紙などにて仕切り、先のより用ひ盡すべし。

◎金もの類に錆の出來たる時は、蕎麥粉を入れて煮るべし。すべて、鹽氣が付けば、錆を生ずるゆゑ、能く拭き取るべし。

◎鐵瓶は、毎朝、湯又は水を上よりそゝぎかけ、而して拭くべし。色うるはしくなる。

◎銅又は眞鍮の器具には綠靑を生じやすし。綠靑は毒になるものなり。食用の器とはすべからず。もし用ゐるときは、是非、鍍錫を引きたるものなるべし。剝げたらば、速やかに補ひかけるべし。

◎簞笥、本箱の類は、カラざうきんにてふく。一年一度は陰干にすべし○庫の内ならば、樟腦又は唐椒子を入れおくべし。

◎花瓶の水は時々取換ふべし。久しく置けは水腐敗して臭くなり、水澁、花瓶の口に附きて容易に除きがたし。竹の花瓶は冬は破れる、薩摩竹のみは然らす。冬は花瓶の水に酒を四分六分の割にて混ぜる。

◎藏の内は、簞笥を二階に、長物を下に置くべし。まはりは歩けるやうにあけて、中間に置くべし。火事の時にも、内より火の出るとなし。棚は吊るし、壁につかぬやうにす。惣べて、下は平生成るべく、あけ置き、非常の時に多く物の運入るやうにすべし。藏に入れて置く物品は何れも番號づけにして、別に手張につけ、之を控へ置くべし。直ちに出るやうにするなり。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

奇談

男女友交の鑑 聖女ポーラ

曲浦

●基督教一たび行はれてより、社會の狀態に幾多の大革新を生じたるは、古今の史跡之を證して明かなるが中にも、女子の眞價の認識せられ、彼等が、男子の玩弄物たり。また家庭の奴隷に等しき逆境を脱して、人生に重きを加ふるに至りたるは、最も著しき變動なりといふべし。之よりして、男子は女子を重じ、男女間に純潔高尙なる交際あるに至りぬ。男女交際と雖も、單に愛戀の終に赤繩の緣に歸するの類のものゝみならず、男女互に、無垢の友誼を締結し、朋友の親交補導を全うしたる美談は、實に基督教ありて以來の、最とも麗しき事實なりとす。キリストのマルタ、マリア等の婦人を友としたるとは、既に聖經の記錄する處にかゝる。

●基督教の感化によりて、男女が、愛戀の故に非ずして、親密なる朋友の義を全うし、互に誘掖輔導する、この美德の、一大標本として、今爰に、紀元四世紀に於ける羅馬の一貴女ポーラ(Paula.)が、彼聖書をラテン語に飜譯したる、高德博識なる聖僧ジェローム(Jerome.)に於ける至美至純の友交の美談を示さん。

●ポーラと呼ばれたる、淑貞純美の婦人は、實に羅馬の歷史に大功業の偉蹟を留めたるシピオ及グラッシの兩家の血統を受けて、紀元三百四十七年、羅馬府に生る。此時は正に、彼初めて基督教を羅馬帝國に輸入して之を信奉したりし、コンスタンチン大帝の登遐を去ると十年なりき。

●英邁なるコンスタチン大帝、既に基督教を、我領土に輸入したりしと雖も、其日なほ淺くして、斯教未だ、邪行娼德の濁流混沌たるローマを一掃するに至らず、ポーラの如きも生れて英明淑貞なりしと雖も、なほ久しく斯教の至高至大なる所以を味ふに至らず。芳紀十有七、豪族トクソチアスに嫁して、アヴェンチン山上の大廈高樓に靜居し、以太利一國の市街を殆ど己の私有となして、榮耀榮華を極めたり。此時ポーラは、羅馬貴族政治時代に在りて、最高の階級に位し、また

古代の婦人中、彼女の如くに富榮なりしものは稀れなりしなり。然れども不幸にして、蚤く其所天に後るゝに至りしまでは、富貴を以て誇の冠となすの外には、他の羅馬貴女に秀でて德行美德を以て稱せらるゝものなかりき。

●然るに、當時マルセラなる博學雋德の一婦人ありけり、ポーラは此婦人によりて、初めて基督の大道を指示せられて、飜然として大信仰心を起し、斯道に安心立命の地を托したり。當時の基督敎なるものは、たゞ飲めよ食へよ、我等明日死すべければなりとせるエピキユリアン的なる社會人心の萎靡腐敗に反動するの餘りに、克己其度に過ぎて、厭身厭世の致となり、難行苦行を以て信者の行となしたりければ、ポーラも、一度び、道を聞いて、五人の娘子と共に之に歸せしより、即ち莫大なる歲入の四分一を擲ちて、貧民に給し、日頃馴れ染みたりし、榮耀榮華の生活を棄てゝ、自ら富貴の身を以て、貧しきもの、病めるもの等を看護し、私費を投じて、死者を葬り、四方に惱める者を尋ねて、救濟至らざることなかりき。而して、己はたゞ麵包と小量の油とのみを以て養ひとなし、數々斷食の行をなして身を苦しめ、美服を撤して、奴隸と同じき敝衣を纏ひ、髮を被ぶり、藁を蓐となして、之に臥し、曾て入浴だになすことなかりき。後人、如斯きを聞きて、必ずや、之を愚なりとせん。されどこれ實に當年基督敎の、混沌たる社會に、嶄乎として秀でし所以にして、後代と雖も、篤信熱實なる大宗敎家が、世の腐敗に慷慨して、一新運動の烈火に燃熾するや、必ずしもこの克己難行の高風に出でゝ、欲を斷ち私を棄てざるはなし。この風の盛に行はるゝ時は、即ち宗敎が、一大革新を來たすの時機なり。彼英國の清敎徒の如き、實にこれなり。

●ポーラが、信仰の行跡は如斯くなりしと雖も、彼女は、心を枯木冷灰に等しうするの冷酷なるものに非らざりき。其血管には脈々として熱血湧き、滿腔熱情を以て溢れ、慈悲仁愛の念深く、友あり遠方より來る、之を迎へて歡待至らざるなく、厭世厭身の道念は、曾て彼女が女性たるの至情を一點だに失はしめず、五人の娘の母としては、モニカが聖アウガスチンを生みたるの愛情ありき。ポーラまた學識に秀で、其ギリシヤ語を解せしことは、赤兒の母乳を呑むよりも容易に、學者の社會に出入することを喜びて、其友とする處には、多く

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

の學才ある婦人ありき。殊に彼マルセラと友とし良く、此博學の婦人が、ギリシヤ、ヘブリウの語に通じて、巧みに聖典を講ずるを聽くを樂しみたり。其友の中には、ゴール人の領主たりし大アンブロースの二人の妹あり、また其娘ブレセラは有名なるカミラスの子孫に嫁し、高僧ワイズマンの筆に芳名を傳ふるフアビオラの如きもまた其交友中の一人なりき。實にや、ポーラの周圍には、第四五世紀時代の羅馬歷史上の光彩を集へたりしなり。而も、其聖僧ジエロームと親交あるに至りて、彼女が深厚なる友情は其全きを見るに至れり。

●ポーラ既に、當時の基督敎社會の女王とし聖女として、四方の尊崇を受くるに至りしや、又時の法皇ダマススの書記たりし彼ジエロームの親愛を受くるに至りき。ジエロームまたこれ當年の俊傑にして、實に、基督敎會史上の大立物なり。身素と富貴に人となり、父母はあらゆる力を盡くして之を敎育し、年十八にして、羅馬に遊び、學叢智淵に出入して、古文學の研究に日を積み年を重ねしが、其德性の傾く處、周圍の奢侈浮華の空氣に慷慨して、平安を基督敎に求め、具に難行苦練を舐め、敝衣褞袍を纏ふて、修道者の生活に擬し、家産は之を擲ちて貧者に與へたり。厭くとなき硏學の念の馳する處より、彼は智識を求めて以太利、ギリシヤ、小亞細亞に入り。基督の聖跡を留めたるパレスチナに赴き、後、シリアのチヤルシスに、庵を結びて道念を磨き、智識を求め、また諸方基督敎國に書を發して、道を問答したり。其智德の名、潔行の譽れは、忽ち天下の重んずる處となりて、遂に法王ダマススの命によりて再び羅馬に歸りて、其顧問となり書記を兼ねたり。敝衣を纏ふて肩を王侯に並べ、富貴に伍しては、尊大自ら持して毫も讓らず、貧弱に接しては、慈悲恩愛を盡くし、貧者は彼の謙讓を尊み、富者は彼の驕傲を惡みたり。然りと雖も、説論深遠、辯口風發、談話巧妙、諷刺深刻、而して德行秀絕、膽大不羈、之を以て忽ち學者宗敎家の列中に敬重せらるゝに至りたり。

●ジエーロムのポーラと朋友の義を結ぶに至りてや、即ち淑德敬虔なる多くの婦人の間に尊崇せられ、彼がポーラの家に在るは、ハツチンソン伯爵夫人の城內に於けるホヰツトフヒールドの如く、またヴイクトリア、コロンナ公主の宮闕に於けるマイケル、アンゼロの如くに、最愛なる朋友たり、良好

なる師範たり、謹嚴なる預言者なりき。ポーラ以下、みなジエロームの智識に聽くを樂しみ、其高德の發揮する處を慕ひいづれも、貴族社會の婦女にして、一見貧僧に似たるの此達人に敬服したり。

●ポーラのジエロームに於けるや尋常一樣の交誼に非ず、友愛甚だ厚かりしと雖も、其結果遂に夫妻の緣に至るが如きものに非ず。純潔謹嚴、毫も狎褻するとなくして、而して刎頸斷絃の友愛を盡くせり。朋友の義は、凡ての點に於て同情なくんばあらず、ジエローム、ポーラ共に貴族の階級の人なり而して學才亦共に非凡なり、相會しては書を讀み、道を談し互に誘掖指導の義をなし、其交りや、たゞに此世を以て終るべきのものに非ずして、共に天國の旅路を步める、傾心の行客の如し。然れども彼ダンテが、ピアトリスを戀ひて、之に導かれて、天界に入ると感ぜしが如きものに非ず、之は相棲を欲するの男女の愛戀によれり。ジエームロ、ポーラの如きは然らず、彼等に在りては、既に男女の區別を忘れて、即ち陰陽相求むるのセキシユアルラーヴなるもの存するに非ず、こは唯に行ひ潔き朋友の愛交なりき。然れどもなほ彼ポーラが女性の美は、心細かに此ジエームロの足らざるを補ひて餘りありしものなり。ラテンの諺に曰く、大都は大寂寥の地と（Magna civitas, magna solitudo.）彼腐敗汚濁の溝壑中に沈淪せる羅馬府中に、高德敬虔なりしジエロームとポーラとの如きは、他に多くの友とするものを得ると能はず、二人の交情、日に深厚なるを加へしも亦所以あるかな。

●ジエロームは紀元三百八十五年、この奢侈浮華に流連せる羅馬を遁れ、其名譽尊榮の地位を棄て、救世主が、此世に在まして、具に艱難を舐め玉ひし聖跡の地を慕ふて去れり。距つる二年、ポーラも亦、其一人の娘を伴ひて、ジエロームを追蹤して、此府を去り、アンチオクに於て、彼に會し、これより、多くの同行者と共に、小亞細亞地方を巡禮し、到る處に、基督敎の監督等の歡迎を受けて、巡遊一年にして、遂に其居を、基督の降誕を以て聖められたるベツレヘムに定め、ジエロームは巖穴の中に庵を結び、ポーラは之に隣りて、岩石を堀りて、また庵寺を營み、兩人互に往來して、共に足らざるを助けたり。ジエロームはこの巖穴に、其絕世の事業たる聖書の飜譯と其註釋とに從事し、また諸國の信徒に書翰を

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

發して、安きを問へり。且又、暇ある毎に、ポーラにギリシヤ、ヘブリウの古文學を授け、其著作を示し、ポーラは、また其庵寺に、諸國より來れる巡禮者を泊めて之れを慰籍したり。

●ポーラのベツレヘムに留まること十八年、齡正に五十七歳にして、此偉大なる淑女は、此世の務を終へて天國に歸れり。其死するや、ジエロームの悲嘆譬ふるにものなく、且や、基督敎國の人民は其訃を聞くや、哀悼痛恨の弔詞雨の如くに、この聖跡を指して來れり。ジエルサレムの大監督は其葬儀を司り。ジエロームは死せる友の眼を塞ぎたり。彼またポーラの爲に碑文を撰びしと雖も、葬儀の日に於けるや、其哀しみ極まりて、一辭の説敎をだになすこと能はずしてたゞ默したりといふ。

●ヴアチカン寺院の壁畫に　ドメニチノが描ける、聖僧ジエロームの像あり、この畫は、ラフアエルの基督變貌の畫に次ぐの大作と稱せらる。其圖は即ち、ジエロームの魂、ポーラを慕ふて、其肉躰を去るの理想を寓せるものなりといふ。ジエロームのポーラに於けるや、其交友の至情、此畫よく之を示すものなりとぞ。而してジエロームは、ポーラに後るゝ十五年間、救主の聖跡にして、且近くは、唯一の心友の此處よりして天に歸りし紀念の地を守りて、其大業を成就し、而して後また永き眠りに入りぬ。

●此兩人の此世の交りや、既に羅馬に在りては十六年の久しきに亘り、ベツレヘムに於ては十有八年、最後三十四年間、一日も渝ることなく、而して、當時この男女の交際に、一點の非難を加ふるもの有らず、兎角に立てられ易き浮名の噂もなく、人々皆其美しきを稱嘆して、後代朋友の龜鑑となせり。男女相交際して、この如くに純潔なる友誼を全うするとは、甚だ難きの事にして、而してジエローム、ポーラの二人はよく之を成就したり。蓋しこれ其高德の致す處にして、また、女性の價値を發揮し、其至情を高尚ならしむる、彼偉大なる宗敎の功德に賴るものならずんばあらざるなり。

たちへだつ涙のひまにはあらはれて　　春満
霞にしつむ淡路しま山

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

講　義

植木盆石の談

井　華

巣鴨の長太郎といへば、東都有名の槖駝師なり。記者一日此人を訪ひて、其業とする處につきて聞きし處のもの、大畧左の如し。

◎植木屋は道樂で、自分が好きでなければ出來ず、それで金儲をしやうといふのですから、六ケ敷い話ですよ。自分が丹青をして作つて氣に入つてゐるものは、手離しするのが惜しいものです。去年の秋も、其處（椽先きの庭を指す）の處に見事な紅葉が一本ありましたのを、井上さんの奥さんが、御出になつて、御覽になつて、長太郎、此木が欲しいから、明日でも、直ぐに屋敷へ届けて呉れとおつしやる。此木が無くなつたら、折角見頃の庭の眺めが惡くなる、惜しくてなりませんけれど、でも賣らんとはいへず、それで申しました。奥さま、今此木を植かへたら、折角の葉をふるつて仕舞つて、また此の庭も、淋しくなりますから、葉の落ちるまで、どうか、外の木で我慢をなしておいて被下い、後で御取りかへ致しますからといつて、さう願ひました。此紅葉（土を高く盛りたる上に在る矮き老楓樹を指す）なども、こんなに木振りのよくて、シダレになつてゐるものは、中々山にでもないものです。私は中々手離しません。百兩なら幾人も買手がついたのですが、二百兩が切れては賣らんといつてゐます。

◎此節は中々、紅葉が流行ります。私の庭にも澤山ありましたのを、大方賣りましたから、これからしつかり買ひ込んで植ゑますのです。諸方へ手を廻して買あつめてをります。三月が丁度植時です。紅葉は、庭木には至極結構なもので、春は新芽がよし、夏は葉が繁つて涼しさうなり、秋は紅葉をし冬は雪でもふると、枝が細かいものですから、それに積つて丸で、白い花が咲いたやうで見事です。それにあの紅葉といふものは、一向に毛虫などの付かぬものですから、椽先に植ゑても差支がないものです。櫻もよろしう御坐いますけれど秋口になると、はや落葉し初めるし、それに虫がつきますか

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

ら、庭には、手前の方に紅葉を植ゑて、その先きへ櫻を植ゑるのがよろしうございます。門の兩わきなどに植ゑるには、紅葉が一番です。

◎紅葉は、東京では先づこの巣鴨から王子近邊が一番よう御坐います。瀧の川は昔からの名所ですが、彼處も、古木は御維新後に切つて仕舞つて、その跡へ若い木を、寄附するものがあつて植ゑたのですから、今では見榮がなくなりました。紅葉は、木が古くならんと、よい色には紅葉しません。

◎先年、庭にあつた紅葉が大方賣れて仕舞つたから、其處で一つ、西京の方の名處などを見物して來て、其後で、庭の工夫をしやうと思ひまして、出掛けましたが、なんともいへぬ景色で、紅葉の立派な事は、とても東京などにはありません。それで歸つて來てから、自分の庭が、まとに面白くなくて、手を入れるのも嫌になつた位で、こんな事なら、なまじ、見物しなかつたらよかつたにと思ひました。それから、此奥の方へ池を掘つたり、築山をこしらへたりして見ましたが、御出の方などは、仙境のやうだなどと、賞めて被下りますけれどもまとにつまらんものです。

◎これは私の發明ですが、紅葉の肥料には紅葉の落葉が一番です。それを腐らかして、下水を交ぜて、木の根元へ埋めてやります。これが一番に利きます。それですから、落葉を集めて、表の下水の中へ打ち込んでおきます。埋めてやつても中々には腐りませんが、妙なもので、埋めた枯葉の方へ、段々に根が張つてまゐります。それに又、この紅葉の葉といふものは、奇躰なもので、冬分に、色々な盆栽を鉢のまゝ地に埋めて置きますに、苔の付いた上へ、この葉をかぶせて、其上から、土をかけておきますと、春先になつて掘り出しましても、苔は矢張青々としてゐます。これが外の木の葉ではいけません。こんな事も、長年經驗してゐますと、考へがつくものでムいます。

◎松ですか、松は、攝津あたりから來ますのが、一番よろしいのです。あちらの方に限りますよ。(記者一本の松を指して問ふ)、これですか、これは、じたれ松と申しまして、これがまた珍らしいものです。此節は段々に接木をして殖えましたが、これは百兩なら賣ります。福壽草ですか、これは奧州あたりからまゐります、なに、こちらでも出來ん事はないので

すが、取寄せた方が安くつきます。すみれは西洋種の香のあるのに限ります。あちらから、取寄せまして、根で分けます。ゆきわり草、これがまた面白いものでして、香はありませんが、これは佐渡あたりからまゐります。蘭は支那のが一番です。春蘭これがまた、支那のでないと、いけません。日本にも山などにはありますが、どうも支那のやうに香がありません。私の二男を、廣東にやつて置きましたが、あちらの山には、香のある春蘭が、一杯に生えてゐますさうです。

◎去年は大變に石が流行りました。妙なものでして、流行りますと、またいろ／＼珍らしいものが出てまゐります。此裏の宍戸様、この御方が、盆栽や植木が御好きでして、私處へも、毎朝御出になる位ですが、最初は石の面白味が、お分りになりませなんだが、段々に御買ひ集めになつて、とう／＼千兩といふ石を御買ひ上になりました、私もびッくりしました。正金で千兩の石ですよ。これは根岸の方から出ましたが、私が御伴して見に參りました。支那から來た瀧石でして、それは見事なものですが、なにしろ千兩といふのです、それをお買ひ上げになりましたので、私もびッくりしました。その歸り途に鰻屋に寄りましたが、其の折、殿様が、長太郎、あの石を私が買ふだらうと思ふたかと尋ねられましたから、ヘエーどうも私もびッくりしましたと申しました。それから、新聞にまで此事が出てました。千兩といふ石は東京には外にありません、岩崎さんの持つてお出でなさる七百五十兩といふのが其次です。宍戸様は、澤山に石をお持で御坐ります。先度も小さなクヅ屋石で、私が團十郎に百兩で賣らうと申してゐましたのを、宍戸様が、團十郎に賣るのなら、百兩では安過ぎるが、なんと長太郎、四十五兩で余に賣らんかと仰るので殿様へ差上ました。石は加茂川石が良のです。

◎盆栽も、今では、ヒチクッたものだの、珍種だのといふのが流行らなくなつて、一躰に文人畫風なのが流行ります。西洋人は、ゴチャ／＼と植ゑ交ぜたやうなものを好きますが、此頃では、やはり文人風のを好くものが出來まして、紅葉なども賞翫します。

◎今の大臣方で、植木のよくお分りなるのは、伊東巳代治さんに西園寺さんの御二人です。大隈さんは、御好きですが、お分りになるといふ方ではありません。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

杜律釋義

松城

杜甫字は子美、少陵と號す。唐の玄宗肅宗二帝の世の人なり。襄陽の人、年少進士に擧げられて、及第せず、因つて賦三篇を奏せしに、玄宗皇帝、其才を愛し、拔んでゝ集賢院に待制たらしめしが、肅宗皇帝位に即くに及んで、右拾遺の官に拜せらる。時恰も安祿山史思明等の亂あり、變によりて四方に流浪し、志を詩に述べて、自ら慰めたり。遺詩六十卷あり杜工部集といふ。凡そ唐の詩を稱するもの、必ず李白杜甫の二人をいふ。然れども謝茂秦の如きは、之を揚ぐることは則ち高華、之を抑ふることは則ち沈實、色あり聲あり、氣あり骨あり、味あり態あり、濃淡深淺、奇正開闔、各其則を極む。吾少陵に服膺せざること能はず、と贊し、蓋し杜は李の上にあるべし。特に杜律の幽玄沈鬱なること、實に唐詩の冠にして、就中其七律を以て、最も妙なりとす。今左に此杜甫が、五言七言の律詩中の五首を摘拔して、いさゝか、之が釋義を試みんとす。

望獄

岱宗夫何如、齊魯青未レ了、造化鍾ニ神秀一、陰陽割ニ昏曉一、盪レ胷生ニ層雲一、決レ皆入ニ歸鳥一、會當下凌ニ絕頂一、一覽中衆山小上。

支那の泰山は、四嶽の宗たり、故に稱して岱宗といふ。泰山、高く天漢を摩して峻峙し、齊魯の境に跨る。借問す岱宗の廣遠高大なること夫如何。此山や遙に齊魯の境に聳えてなほ山色靑々、眺望際涯なし。此山なる哉、造化は、神異靈秀の氣を鍾めて之を造り、日月、爰に出沒して、晝は夜を界し、夜は晝を界す。層々たる雲霧此に生じ、之を望めば、胸間盪ふが如く、歸鳥爰に影を沒す、其行方を送つては、目睫爲に決裂せんとす、一度び岱宗を望めば、神魂飛越するの狀既に如此し。然るに若し時ありて、この絕頂神氣凝るの處に登らんか、衆山凡て小塊に似て、其景快哉また言ふべからざるものあらん。孔子は泰山に登つて天下を小にすといへり、この大快觀の時、我希くはこれを得んことを。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

春望

國破山河在、城春草木深、感時花濺レ涙、恨別鳥驚レ心、烽火連二三月一、家書抵二萬金一、白頭掻更短、渾欲レ不レ勝レ簪。

時世、内亂續發して、唐の天下幾ど亡ぶ。國は破れたり、されど、江山の形容依然として昔の如くに、毫も社稷の盛衰を顧みず。國やぶれたり、城内人住む稀に、温風慈雨下るによりて、草木時を得て茂り、宮も藁屋も、八重葎にまかせて、滿目荒涼たり。此時流涙の愁人我、此悽時に方り花を眺むれば、花美なりと雖も、花の雫か、我涙か、衣の袖は露に沾ひ、鳥聲嘉なりと雖も、別離の客となりては、哀々胸を騷がし、心を驚かして、故里如何にと思ひ將た禁ぜざらしむ。昔は之を娯しみたる花鳥も、今は徒らに悲哀の媒となる。嗚呼兵燹烽火多時に亘りて、歸らんと欲して能はず、會〻家書を獲れば、万金を懷する喜びあり。我、既に老いて、亂を經て今や流寓す。髮本白し、如今更に短きを致して、簪を加へんとするも能はず、千恨万憾禁ずるに由なきぞ悲しき。

孤雁

孤雁不レ飲啄一、飛鳴聲念レ群、誰憐一片影、相失萬重雲、望盡似二猶見一、哀鳴如二更聞一、野鴨無二意緒一、鳴噪自紛々

多情多恨の詩人、自ら喪亂に値ふて、花にも涙を濺ぎ、鳥にも心を驚かす。折しもあれや、哀はまさる秋の空、孤り行くなる雁金の、清水あれども飲むことをせず、好餌あれども啄むに意なく、哀々飛鳴して、別れし友を呼ぶ。孤雁を思ふの情は、また詩人が流涙の嘆。景に感じて腸爲に九廻せずんばあらず。一片零丁の影、誰か之を憐むものぞ、詩人實に同情に堪へず。雁は群を樂む、今は離散して、萬重の雲間に相共に其友を失ふ。この杜甫、また骨肉相失つて、天涯万里を隔つ、鳥を悲しむか、己を悲しむか、玆に至つては、心たゞ亂れに亂る。今に於ては、孤雁を哀しみの友として、之を望めば、影既に沒してあらず、されど猶之を見るがごときの感あり、其哀鳴をせめてもの心やりとせしに、また聞えずなりて、更にも聞くの思あり、其影、其聲、念々に留まりて、斷腸また斷腸。然るに何等無心の野鳥ぞも、此時たゞ喧噪紛々たり。途に出れば多人を見る、されど我愁懷を察するもの一人もあるとなく、情を語るべきなし。遺恨何ぞ禁ずべけんや。之を吟詠するものも、亦其腸を斷たずんばあらず。

江村

清江一曲抱レ村流、長夏江村事々幽、自去自來堂上燕、相親相近水中鷗、老妻畫レ紙爲ニ棋局一、稚子敲レ針作ニ釣鉤一、多病所レ須惟藥物、微軀此外復何求。

坎坷落魄、身を江村に處して、幽居に安んず。幽居の狀果して如何、江あり水清し、村里をめぐりて流る。蓋し幽境の景。而も日永き夏の事とて、村人悠々時を銷す、人事また幽。軒端の燕、おのがじゝに來去して、人關せず、水中の鷗相親しみ、人之を驚かすとなし。之また幽の幽。家に在りては、老妻事なし、紙に畫せる棋局を弄んで長日を送り、野にありては、幼童自ら工夫せる鉤を以て魚を釣る。その狀また幽。事々斯如く幽にして而してたゞ已れ久しく消渴を患へて、未だ治せず、これ唯一の心に關するもの、されど、これまた一の藥物あれば足るのみ、富貴榮達何ぞ求むる所ならんや。この心また幽居をして更に幽ならしむるに足れり。

夜

露下天高秋水清、空山獨夜旅魂驚、疎燈自照孤帷宿、新月猶懸雙杵鳴、南菊再逢人臥病、北書不レ至雁無レ情、歩レ檐倚レ杖看ニ牛斗一、銀漢遙應レ接ニ鳳城一。

杜子美、南方に流寓して、長安に歸り得ず。客悲長恨の夜、此作あり。秋天高く、露下り、水清く流る。これ當夜の景。樹葉搖落して山寂寥、更夜獨り爰に在りて、旅客の我、今更の如くに秋既に來るに魂を驚かすもの、これ當夜の情。孤り帷を垂れて、影かすかなる燈の下に坐して、己が影を友とし、空にはかゝる上弦の月あり、此月にきこえかげてか、誰人の妻か、砧うつ聲しきりなり。折柄の景、一として物思ふ種ならざるはなし。思ひめぐらせば、この南地の、秋に會して、菊花の開くを見ると既に二たびなり。北より渡る雁金の、故里人の玉章かけて來らず、雁また無情。老身、杖に倚り、檐端に出でゝ牽牛織女(牛斗星)天の河原に、鵲の渡せる橋をたよりに、年に一度の逢瀬をなせど、我は別れし人に逢ふよしもなし。この天の河原は、滔々万里に亘りて、遠き都の長安(鳳城)にも達すべきに、我はこれに流されても、彼に歸らんと希ふとあらんも得べからず。旅客、歸思頻りにして未だ歸期あらず、愁腸徒らに斷絶す。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

問答

問

（上略）　私事當地の小學校を修めしのみ（十四歳卒業）何も〳〵存じ候はず御社の女學雜誌を拜見いたし候は嗚乎の限に候へど世の君たちの如く都に出でもの學せんも學資なくたゞ御社の雜誌を師とたのみて拜見いたし候、あまりのおろかにて恥かしうは覺え候へども何れがよきものにやと思ひ惑ふと左に申上候まゝ宜しく御教を垂れ玉はりたく願上候

當地にては善かれ惡かれ友達の多からんをほめたゝへ候へども（私は五歳の時より當地に來り當年十六歳までに心の底まで打明ろ如き友一人も無之只だ親切に交際いたす友二人有之候のみ）如何のものに御座候や

中等位の家にて大家に見習ひ奉公を致し候には東京が宜しくやまた京都の方宜しく候や

答

一　友の無きほど寂しきものはなし。よしや相見ずとも、心を知り合ひ、互ひに許しあふ程の友しあらば、たとひ海山千里を隔つるとも、心はにぎやかなるものなり。然し乍ら斯る眞の友は決して多くは得がたきものにて、もしや一生に只だ一人を得ても、幸ひと申すべきほどのものなり。之を奈何ぞ五人十人と其の多きを求め得べきものならんや。當節に言ひはやす友なるものは、眞の友にてはなし　たゞ辭儀一片の付あひに過ぎず、路上袖ふり合はすものと、さしたる變りはなきもの也。御身すでに、二人ありと謂ふ。之れ優れたる幸ひには候はずや。但し、友のなきは、友とすべき人の無きのみならず、友を得べき吾が心の無きなり。心を打あけ、誠を人の腹中に置き、信じて他の難を負ふほどの信義だにあらば、友と云ふものは、自から出で來るもの也。

二　東京と西京とは、奉公の模樣全然相異なる。目的次第にて、何れをと撰定せざる可らず。且や、關以西は西京に習ひ名古屋より此方關東は、東京に倣ふ。國柄によりても考へざる可らず。西京の大家は古風なり、東京のは今樣なり。就中、舊大名、新華族、紳士、高官の人などの家に奉公せんには、東京ならざる可らず。然し、東京にても、江戸つきの大家は古風にして律義に且つ堅固なれど、お國もの又は成り上りものにて今ま東京にある所云る大家には、いかさま者多く、家庭のよく整のひたるものなし。近頃は隨分奇しからぬ事も流行し、奉公に上る親々も、夫を承知にて差出し、利用して嫁入仕度を調ふるもあり、されば何れにせよ、其家風は穿鑿して後ち決定あるべし。名前に驚かされて信ずるは不可なり。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

江戸の華（一）

◎主上、鳳輦を東に轢らせ、江戸を東京と改めて、此處に政の府を置かせ玉ふとなりてより、花落ち花開きて早くも三十年の一と昔とはなりぬ、回顧すれば、此時、官軍、都の四方を追取りまき、一號令の下に千代田城を攻め落さんと構へたる、今にも花のお江戸は修羅城とはならんとせし也。時なる哉、敵味方、二人の傑物ありて、談笑の間に、大事を決し、砲煙、朝の霞と散り、銃鎗、夕べの月露を宿して、戰ひは其まゝ休止せられたり。東京の今日あるは即はち其の賜なり。

◎所謂る其の二人のうちの一人は、早く薩南城山の露と消えしが、今ま一人は健在して氷川の流に耳を洗ふ。こたび奠都三十歳の祝ありとて、一句を催しけるは、

さく花を散らさで祝へ田舍人

痛快、骨を刺すとや言はまし。

◎當時、慶喜公、會津桑名以下の藩士を率ゐて、浪華城より京都に入らんとするの途上、伏見鳥羽のあはひに於て、ゆくりなくも開戰あり。錦旗、風に飜へりて朝敵の名轟きたり。奇しむべし、衆は寡に敵せずして、幕軍次第に退き、遂に大阪に引返へす。其の夜、征夷大將軍德川慶喜公は近侍若干、會津侯をあはせて主從僅かに十餘人密かに軍艦に乘じて江戸に迴航し、哀れなる御姿して、濱御殿に歸着せられき。時に明治元年正月十三日の拂曉なり。

◎其日、すぐさま大評定あり、衆議囂々たり。然し乍ら、官軍の進擊も左程急にはあるまじと、空賴めするものあり。眞や、其比京都の官軍は微々たるものにて、而も、壯士皆な口を開き議論多岐にして決せず。況んや、幕府二百六十年の勢威は天下を壓倒し、たとひ內實空虛となるとも、人は尙ほ見掛に驚ろくの時、何人か容易すく死地を犯さんや。其後上野東叡山に立てこもり僅かの彰義隊を討つすら、非常の苦辛なりしものを、東海五十三驛、國司譜代の大小名が向背もまだ定かならぬ時、誰ありて直ちに進擊の機を決せんや。伏見鳥羽の戰捷すら、實は意外の好結果にてありしものを。

◎流石は西鄕先生の果斷にして大機に明るき、衆議紛々として決せざるを駁せんとせず。一日、書を吉井に遺して飄然して曰く、江戶には勝、大久保も復た出仕せしよし、花見に參らんと思ひて出で立つなりと。忽然、行方を失す。此に於てか、先生の徒五百名、ゾロ〳〵と、先生に尾し、追ふて水口邊に到る。これ官軍いよ〳〵東都進擊に確定せし決議なり。

◎左るにても、官軍容易に到來すべからず、みち〳〵遷延して一二ヶ月を費すならんと思ふもののみ多かりき。二月十二日、幕府大廣間にまた大評定あり。衆議いよ〳〵紛々、

箱根の險に、據りて官軍を防ぎ、關東の諸侯に結んで拮抗せんと云ふものあり

使節を出して、官軍の入關を止めんと云ふもの

慶喜、單騎にして上洛あらば、英士皆奮はんと云ふ者

軍艦を督して攝津の海に出沒せんと云ふ者

直ちに薩摩長門の二藩を討たんと云ふ者あり。

此時、勝海舟、一言を發せず。慶喜公ことに其の所存を問はれしかば、海舟答ふらく、

凡そ興廢存亡は氣運に關す、又、人力の能くすべき所にあらず、今若し戰に決せば、邦家安危の爲に一死を期せんのみ。我、軍艦を督し、駿河の海濱に出で、上陸二三百の兵をもて官軍を拒まは、我兵寡少、衆寡敵せず、一敗せん。其敗に乘じて敵兵、淸見關、淸水港に逼らば、軍艦を進めて橫に之を砲擊せん、極めて敵を破ると必せり。即時に我兵を增し、接戰し、艦より敵の中央を打擊せん。反掌時間必勝すべし。此機に乘じて關東の士氣增奮はゞ、直ちに海道の味方を督責し、火を放つて敵の來往を妨ぐべし。然らん後、軍艦三隻を率ゐて攝海に乘入り、西國中國の海陸を絕ち、時宜に據りて、大阪市を燒拂ひ、京都の糧道を拒絕し、暫く天下の變を窺はん。總督兵敗走せば、他二道（一は甲斐を經て江戶に入る者。一は東山道を經て、板橋に入る者を云ふ）の軍兵は進退據を失し、其施す策を失はん。又上國海路を絕たれ、運送自由を得ざる時は、如何んぞ、他に策を行ふことを得ん。然れども、是れより天下瓦解し、四方の大侯伯は各爭ひて外國に通じて其便を逞うせんとし、又彼我の奸商は互に相結で海外に密交易し、國權分裂して之を一統する能はず、終に行く處を知らざる也。然らずし

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

て、天怒を畏れ、天裁を仰ぎ、順々として條理を踏まんと欲せば、至難重なり到り、終に又其結を知らず。故に云く我主公の決心を承らん、二途、何れを選ばるやと。（幕府始末に據る）

◎慶喜公もとより恭順に決定せられ、民の爲とて忍ぶが岡に身を忍ぶとの一詩を詠じて、上野に謹愼し、全權を勝安房守に托せられたり。勝氏惟へらく、西郷は機を失するものにあらず、必らずや迅速に東上せん。官兵、城に迫り、死生眼前に危ふく、人心極に達するの時に到らざれば、大事決す可らずと。之より、病と稱し、家に横臥す。幕臣皆な憂憤し、日夜來訪數十人、或は激論し、或は刄を拂ふ、府下、宛ら鼎沸するに似たり。

◎時に、勝氏思へらく、若し地を易へて我をして官軍參謀たらしめば、固より一兵を弄せずして幕府倒すべき也。若し、幕軍にして、箱根の嶮を守らば、密かに二三十人を都内に送り、一夜風に乘じて火を放たば、人心洶々として敵既に都内に滿りとせん。箱根を守るものも亦疑つて俄かに走歸すべし。此兵俄かに都に還らば、都人は既に官軍大に侵入せりとせん。此機に乘じて、軍を進むれば江戸城の堅牢も亦た何んかせんと。勝氏は、素より、一兵をも箱根に置かざりし也。

◎勝氏亦惟へらく、主府は天下の公有なり、德川氏の私有にあらず。主府もし一と度び燒れなば、たゞに百万の蒼生を殺すのみにあらず、京都、大坂も亦た燒かれ、天下の富瓦解するに至らんと。則はち、勝氏は尤とも江戸の火を恐れたるなり。此に於てか、夜更けて、密かに四手駕を四方に飛ばせ、博徒、火消、遊人、乞食の類に至る迄で、一々其の頭分を訪ひて、火の用心を委賴す。蓋し、陸軍總裁たる勝鱗太郎が深夜親から駕を枉げての依賴は、躰面を重んずる彼等の太だ榮とせし所也。古老に聞く、江戸市中、此時ほど失火なかりし時はあらずと。

◎然れども、單に火を防ぐのみは不可なり。不幸にして江戸城一火せられたらん時の準備も亦無る可らず。則はち、府外宿はづれの東西南北、大凡そ十有餘ヶ所の避難所を設置し、亦た、房總の漁夫、品川高輪の舟もちに至る迄、密かに且つ普ねく布令し、一朝官兵城に迫りて、無益の戰を催さんとすれば、我先づ火を放つて江戸城を燒き、蒼生をして一時に立

退かしめん。此時、火の手上ると見ば直ちに船を岸頭に寄せよと。則はち亦た爆裂彈をかの多くの頭分に配布し、準備大方と〻のひたり。斯て、官軍は既に高輪に迫る。時に慶應四年（明治元年）三月十日なり。

◎官軍、十五日を以て江戸城惣攻擊の日と定む。高輪には西鄕吉之助あり、新宿には板垣退助あり、板橋には伊地治あり、千住には北陸先鋒あり、伊地治正治の策により、後に火を放つて退路を塞ぎ、一擧合擊せんとす。先だつと二日、勝氏一書を西鄕氏に贈る。

昨年以來上下一致の旨なれども各其中に私あり終に當日の變に及ぶ者は皇國人物乏敷に因る就中伏見の一擧一二の藩士を目して失錯あるは我尤恥づる所、堂々たる天下終に同胞相食む何ぞ其陋なる哉我輩忠諫一死を以て報ずべきも既に其失前日にあり今日何の面目ありて口を開かむ然りと雖ども不日にして一戰數萬の生靈を損ぜむとす其戰各名節條理の正敷に非ず各私憤を包藏して大丈夫の爲すべき所にあらず吾人之を知れども官軍猛勢を奮ひ白刄飛彈を以て漫に庶弱の士民を刧さば我も亦一兵を以て是に

應ぜずんば無辜の死益多く生靈の塗炭益長からん歟軍門實に皇國に忠する志あらば宜しく其情理と情實とを詳にして後一戰を試みよ我輩も亦能く其正不正を顧りみ敢て漫に輕擧すべからず、嗚呼我主家滅亡に當りて一に名節大條理を持し從容死に就く者なきは千歲の遺憾にして海外の一笑を引んのみ我輩之を知れども力支ふる能はず共に魚肉せらる〻者は深怨銘肝日夜焦思し殆憤死せんとす憐れ其心理を詳察あらば軍門に臨んで一言を談ぜむ幸ひに熟考せられば公私の大幸死後猶生るが如くならむ謹言

勝　芳

參謀軍門

◎其の翌即はち三月十四日、勝氏單騎、高輪の薩摩邸に到り待つ。西鄕氏後れて入來り、先づ哄笑して「先生も今度はお弱りか」と言ふ。談笑自若たり。大事忽ち決す。即座、桐野を呼び、明日進擊猶豫の旨を諸隊に傳へしむ。勝氏、又單騎赤羽根橋を過ぐる比、狙擊數發、丸、頭上をかする。則はち

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

下つて馬を引き、又跨つて、千代田城に入る比ひ、板橋、新宿、千住の斥候歸り報じて曰く、明日進擊猶豫の準備只今はじまれりと。機敏かくの如し。

◎西鄕氏、翌日、靜岡に總督宮を訪ひ參らせ、又直ちに、京都に趨り、自ら責を負ひて、德川氏處分の至當に出んことを主張し、遂に世の知れる如き條々をもて江戸城明渡をうけ、當日の式場には、西鄕先生居睡りをする間に、受授恙なく了れり。城の番人すら明らかには知らざりし。後ち數日やうやく聞知りて、初めて切齒するものなどもありしとぞ。

◎斯て其後、上野彰義隊の亂に、三枚橋あたりも燒け、上野寺內の伽藍も燒けたれど、江戸八百八町、四方四里の大都會は、斯の始末の內に平易安穩に經過し、近在に逃れしものも暫らくして立還り、花のお江戸に變りしこととてはなし。只だ錦の切れを肩に付たる西國クヤ〳〵なまりの武士が往來するのみにて、酒樓茶店のにぎはひは反つて增し、天下の主府は依然として其の榮を維持したりけり。

怪賊靜馬の話

（下）

八木文卿述

其後は、所々方々で不思議の盜難に合つた。如何にも奇怪である。其の巧妙なることは、舌を卷く斗りで　何の形跡もなく只だ物が無くなる斗りだ。或る時、例のお寺に、私と私の父、と、外二三人集まつて、雨の日靜かに遊びくらした。連りに碁を圍んで居る中、傍に置いた刀が皆な無くなつた。オヤッ、今迄であつたるがと立驚いて出て見ると、長廊下に、ズーッと泥草鞋の跡がついて居て、其行先が知れぬ。殘念で溜らぬから、隅々迄でさがして何處から這入つたか、逃げたかと考へても分らなかつたが、ふと氣が付いて見れば、高い石垣があつて、石垣の下に竹藪のある所から、竹の梢を握つたまゝ、石垣を上から下へ、橫に滑り降りた跡が分つた。夫れで藪から先は山に續いて居るから、固より早や追かけやうも無い。其後、又或る晩に、這入つた。今度は、目が覺めて氣が付いたから、ソレッと言つて出かけると、廊下をバタ〳〵〳〵と驅

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

けてゆく足音は、何十人と居るらしい。恐ろしい大勢の泥棒だと欺されて、あとで考へれば、之が靜馬の千人の足音をさせる術であつた。

戸を閉ても這入り、庫の戸前が丈夫でも這入り、それで出沒自在だから、如何んとも仕樣が無い。就中、あのお寺は人家に離れて居てあぶないと云ふので、毎夜大勢泊りにゆき、互ひに綱を手に引かけて置いて、一人の目が覺れば、之を引いて、皆なが一時に起き、又、早鐘を鳴らしたら、下から大勢集まつて來ると云ふ約束にして置た。

スルト、或る晩、また、例の如く、這入つて來た。ソレッと言つて皆なが起ると、ドタバタと大勢の足音をさせて逃げたが、今度はもう恐れないで、いよ〳〵追かけて、早鐘を鳴らした。下からも大勢上つて來た。渠も窮して、鐘つき堂の中に逃げ込んだから、大勢がワア〳〵と言つて之を取圍んだが、鐘つき堂の中もまたワア〳〵と言つて、其人聲は何十人居るか知れないやうな騷ぎである。何しろ、靜馬一人でなく、子分が大勢居るのかも知れぬと云ふ恐氣が付いたから、只だ堂を圍んで、騷いで居る中に、人々の頭の上から。フワーリ

と一枚雨戸が飛んで來た。アレッと驚ろいて上を見ると、其の雨戸が三四人の頭の上に乘かゝる比、堂の上から靜馬が飛下りて、雨戸の上をちよいと踏臺となし、直きに、あちらに飛んで、山の中に逃げ込んで、もう行方が知れぬ。其の迅速なると飛鳥の如く、アット言ふ間に、早や見えなくなつて仕舞つた。

凡そ　此の躰裁で長い事、捕へるとが出來なかつたが、惡運盡きれば、藝の力も亦た盡きるもので、ふと宿屋に知らぬ親で泊つて居る所を見出され、かねて手が廻つて居るから、近邊の若者が皆な集つて來て、イキナリ、袋だゝきに爲た。迚も捕縛した所が、繩ぬけをされる丹りだと言ふので、半死半生の目にあはせて叩いて仕舞つた。夫れで、一時、牢には入れたが、直きに死んで仕舞つた。

渠の生涯は眞に不思議で、たゞの泥棒とも思れなかつたが、夫の不審よりも、一層不審なるは、渠が藝術の巧妙なるとであつた。人間の技藝と云ふものも、斯迄に上手になるものかと思へば、恐いやうにもあり、又、賴母しいやうにもあり、一つは用心にもなり、又一つには勵みにもなる。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

故小此木秀野君の

絶筆小説（つゞき）

さては片目の兒の來りしと思し、要無きことをと、打つぶやきつゝ、聞くとも無しに、烟草燻し居たるに。孃樣ッ、お前は私を欺して居るだらう。何のまあ此兒が突然に、そんな事を、私がお前を欺して善いものか。でもお粂めがさう云ふたよ。お粂とは何處の。あのこゝの飯焚の。それが何といふたのぢや。孃樣は、もう用が家に出來て、明日は東京とやらへ歸らつしやるといふたから、そんな事があるものか、孃樣は己をおいては何處へもゆかぬと、昨日も云ふて居てだもの、この虛言つきめと、唾沫はきかけて遣つたれば、だからお前は馬鹿だ、片目の馬鹿だ、と、いふては勝手口のところで、頭を痛くなぐつてけつがつた。僞言か、信實か、孃樣や、もし孃樣私は悲い、若しお前が歸京つてしまうて、何時までも來なかつたら、私は一人になつて何うやらと云ひも終らず、ワッと泣き出たる樣なり。世の無情冷酷のうちにのみ、人となりし身の、一とたび奇しき緣にて、人のめぐみ の 露に霑ひ、愚なる心の一と筋に、其人の慕しきにや。吃りたる聲音には、おそろしきまでに熱を帶びたり。

可愛や、其方は欺されたのぢやぞや、何の、私が、其方を捨て、無言て歸つて善いものか、私は何ういふものやら、其方が可愛うて〱と、跡は同音に泣く。餘の事よと、われは起き出で、椽先に進めば、隣室の椽に腰掛けたる童の火傷の半面と、盲たる片目とを斜に見得たり。

實に龜とは、今朝見し童にてありけり。美津子の姿は隱れて見えねど、細やかなる指は、其棕櫚のやうなる頭髮を撫で居たり。軈て、孃樣お前の今いふたが實の事なら、私や嬉い、嬉いと、にや〱と笑みたるを見て、早や情に堪へでや、腕もて童が頸をからみて、引よせたるらし。其恍惚として、醉へるが如きは、愚なるものの常とは見ゆれど、盲たる片目の異樣に輝きて、ゆがみたる唇の邊に笑の皺寄たる風情、何故なるやを知らねど、われにはこゝに何者か、忌はしき恐るべきものゝ、纏へるやう思はれ、われ知らず、庭下駄はきたるに、其音きゝて顧みたる童はわれを睨視したり。其片目は今朝

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

見たると同じく何ともいへぬ訝かしみの念と悪さげなる色とをもて閃めきぬ。其儘美津子が手をふり放ちて、龜は飛鳥の如く、彼方に逃去りぬ。其傷無き片頬には、健治の係あるかは知らねど、われはたゞ其樣の穢きにあきれぬ。何故兄樣が可恐いのやら、逃げてゆいてしまひました、あれが先程お話申した龜でござんすと、遺憾げにいふを去りとては、美津さんの目に彼奴が、健さんに似て居るとか、何處を何う見ていふのやらと、輕く戲言めきて、諷すれば、何時に無き不與の躰にて苦笑しつゝ今しも童が持て來しとおぼしき貝をば、叮嚀に床の間に陳べぬ。涙脆きも程こそあれ、女子の身の要なき事はせぬものよと、いはむとせしが、今は悪かりなむ、またの時こそと思ひかへし、初は何處へと問ふに、今方片桐の清子さまのところへ、兄樣も來給ひたれば、遊びに來ませと文の使に遣りました。片桐の別莊、兄樣は今朝御覧なされたでござんしやう、彼の西の方の、是から數町先の、西洋人の館の右手の家でござんす、もう濱手傳ひにかへりまする時分といふ。言半に初は歸り來りぬ。
日に照されて上氣したる、肥たる頰のあたりを押へて、いつもの調子輕く、只今歸りました、片桐の孃樣からよろしく、直に參じますとのお傳言でござんした。龜は今日はまゐりましたか、といふ。今方來て歸つたばかり。左樣でござんしたか、可笑しな兒でござんすこと。可笑しいとは何がと美津子は早や不與の色あるに、初はホホホと打笑ふて、今丁度濱で逢ひましたら、彼のお隣のお方は誰ぢややらと問ひます故、あれは孃樣の兄樣よと申しましたに、首傾げて先きに久米どんの話に、兄樣では無いと聞いたると、何やら不思議な問ひ、今こそは孃樣の兄樣よ、それ聞いて、お前は何にすると申しましたら、可笑な顔して、物をもいはず、うつむきながら蹣跚とあちらへゆきました、と、語るも聞くも心にとまる話にはあらねど、今は兄樣なりといふ言葉に、美津子は面恥げに微笑みぬ。ものに拘らぬ、われさへも、また。
少時にして清子の訪れ來り、それよりはトランプの鬪に日の西に傾くも知らでありき。
樂しき夕餐の膳に向ひし刹那、突如一片の電報は東京より飛び來りぬ。母病氣悪し、直ぐ歸れとなり。あまりの不意の事にわれさへ絶驚しぬ。日頃わづかばかりの事にさへ、心痛むる美

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

津子は、半ば失神ひたらむやうなりて、初のたゞうろ〳〵するのみなるも、道理にこそ。今は慰むる遑だになし。遲れては詮無し。荷物纒めて、後の終列車にて、われも歸れば、五時の發車にはまだ五分あれば、間に合ふべきにと、二人挽の車急ぎ仕立させ、疾く〳〵と二人を扶け乘せ、口早に旅中の心得、初に言含めぬ。車は馳せ出しぬ。半は夢中にある人を乘せて。

斯くて、われは逸早く美津子と、われとの衣服調度を收めて、人生の賴みがたく喜憂の定めがたきを思ひ、愁然として、獨り、終列車を待ちぬ。

日も早や暮なむとする頃より、鳴神おどろ〳〵しく、雨ばら〳〵と降り來り、忽にしてやみ、また忽にして降る、空は墨の如くにして、濤の音轉た物凄し。

二尺ばかり開放ちたる戸の外面より、突然に窺ふ、怪しき人影あり ほの暗きランプの光はその蓬のやうなる髪に映りて、白き片目は閃きぬ。

孃樣はと、小聲に問ふ。かれは龜なりき。

孃樣は東京へ歸つたと、煩しきまゝに叱りつけたるまゝ荷物調へつゝ顧みもせでありけり。龜はそのあやしき眸子を放ちて、室のうち一とわたり見廻はしたるやうなりしが、わッと魂切る一聲、どうと倒れたる音す。顧みれば龜はあらざりき。

車がまゐりしといふ婢女の言葉に、われはまた龜を思ふの暇無く、急しく出發したり。車は暗夜を衝て馳せぬ。横ざまに降り注ぐ大雨は、宛然彈玉のやうに幌をつるべ打ち、風は樹々の梢をかすめて、濤の聲雷霆の音に和し、逗子の濱邊の光景、また今朝のものにあらず。

* * * *

昨日は夢なりき、今日もまた左ならむか。われは學窓を出て、美津子を娶り、間も無く可愛きものをさへまうけぬ。この夏は、少時の閑を得てければ、相伴ふてまた逗子に遊びぬ。山の色、水の音、三年の舊そのまゝなれど、人は昔の人ならず。

龜が事は、美津子の折々語出づることもありたれど、心にもとめで過しぬ。如何にせしやらむと、所の者に聞けば往年、嘗てわれ等が此處を去りしあらしの夜、身を海に投じて、骸は翌朝、汀に漂着きたりとぞ。氣の狂ひしにもや。何故

とも知らずとなり。
村人が葬りて、そが上に建てたる數寸の石の下に、龜は眠れるなり。美津子は朝毎に、こゝに詣うで、水を注ぎ、花を手向けなどす。歸來りし時は、其瞼の紅を潮して、睫毛に露を宿せるが常なりき。

あはれなる童が、此世の紀念を知らむとおもはむ人は、御最後川の畔の小丘を訪へかし。

（完）

仁君 名言

或國の守の長臣、儉約を旨として國政を司る、折しも不用の役の多きを省ける時、足輕の組百二十人なりけるを、六十家として事足るべしと評議一決しける時、主君の仰せ給ふやうは、六十人の者には暇をつかはすやと尋ねらるゝに、仰の如くなりとこたふ。そのものどもは獨身なるか、また兩親妻子等あるにやと仰せられしに、こたへて申すやう、何れも親も妻子も有るものにて候と申しければ、さあらば暇をつかはしなば、大勢の者ども皆路頭に迷ふべし。少きは多きに替ふべし。衆は少きにかへがたし、今大身の内には、万石ちかく取るものもあるべし、それを二三人暇を遣はしなば、まのあたり三万石ばかりの有餘あるべしと命せ出されしによりて、その議はやみたりとぞ。良君は仁心も亦薄からざる事と人々申しあへぬ。

（雲萍雜誌）

歌くづ

ちやうてい

もりかげのおちし椿を笹にさし
　里のをさめは弄ぶなり

いろかへぬ老木の梅をしるべにて
　今年も宿に春は來にけり

うゑおきし先のあるじやたれならん
　梅の一本花さきにけり

唐猫が妻よぶ聲のきこゆなり
　かたわれ月のかすむ此夜に

軒端ふく嵐に夜半の夢さめて
　ガラスの窓に星ぞきらめく

逢見てし君がおもはの夢さめて
　うつゝにかをる水仙の花

わび人の心も春になりぬらん
　外山のかすみ野邊の若草

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

時文

◎福澤先生浮世談　　時事新報社

これ曩に新年の時事新報紙上に連載されたるものにして、蓋し福澤翁が、某氏との談話を筆記したるものなりといふ。浮世の男女交際法即ち男子の不行狀、婦人の無勢力よりして、遂に家道を紊亂するの事實を切論したるものにして、議論痛快誠實、其要領は、當時の本誌片々欄にも摘拔したるが如し。翁の如くにして、此種誠實有道の意見を抱持して、屡々之を發表せらるゝこと、蓋し以て世道人心を指導するの力、尠からざるべきなり。

◎新小說第三年第三卷　　春陽堂版

本卷載する處、田村松魚郎の『磯馴松』、繁野天來の『こがらし』今野愚公の『今聖人』の三小說は、これといひて、珍らしきふしもなし。露伴氏の『百花譜』、これかつて許六が執へたる題目を採りて、前者を凌駕するの文采着想あり。忍月氏の時報いつもながら見るべし。

◎女界文壇雜俎　（本誌〆切迄）

◎女子の特性品性の修長（高橋順次郎）	花の園生第八年第五年
◎女子を美人と名くる所以（村上專精）	同上
◎結婚と離婚と（斗南）	女鑑第百五十一號
◎女子の任務の一（田中敬一）	女子の友第十七號
◎女子教育の振興を望む（新原俊秀）	教育時論第四百六十四號
◎臺灣女子の風習（高木平太郎）	東京朝日新聞三月五日以後連載
◎家庭の采	大阪每日新聞三月六日以後
◎婚姻の定義に就いて（白告生）	因伯時報二月廿五日
◎婚姻論（藤田謙造）	鳥取新報二月十九日
◎母の教育に就いて（蘭溪女史）	大日本第二卷第十七號

片々

◎高等女學校令の發布に就て　尋常中學校の擴張に從ひ、高等女子教育の必要なるは言ふ迄もなく、近頃稍や世人の注目する所となりたるが如し。昨年の夏全國教育會議に於ては一府縣に少くも一高等女學校を設立することに決議し文部省に建言せり、然るに近來其說愈ゝ高まり、各府縣又は相當の人口を有する市には制限を定めて高等女學校を設立せしめざるべからずとの議文部當局者間にも贊成者多く、遠からず勅令として發布せらるゝに至るならんと云へり。（東京朝日新聞）

◎神戸混血兒の教育　目下神戸の混血兒にして、當地の學校に入學し、初等教育を受け居るものは、神戸高等尋常小學校に百餘名、師範學校附屬小學校に十九名あり。而して此等の混血兒は、我國の兒童に比して、一般に記臆力鈍く、品行も亦正しからざる方にて、之れを細評すれば、（一）混血兒の就學年齡は、平均六年十一ヶ月にして、我國兒童よりも稍や遲く、（二）在學年齡は、一般に我國兒童に比し短し、殊に女兒は、半途にして退學する者多し、（三）體質は、比較的强壯なるものゝ如し、（四）學科は、唱歌・讀書に長じ算術、歷史、習字に短なり、而して記臆力は、我國兒童に比し、槪して劣れり、（五）氣質は、活潑にして、稍々疎暴の風あり、（六）混血兒は、一般に國家を思ふの念薄く、退校後學校に對しても冷淡なり。特に其母親は、所謂洋妾又は、南京娘等にして、孰れも無教育の者なれば、教育に對する觀念薄し、以上は重に師範學校の附屬小學校の在學生に就て調査したるものなるが、神戸小學校在學の混血兒も、同樣の有樣なりと。

◎臺灣女子の風習　在臺灣八芝林國語學校女子分教場教諭高木平太郎氏は、東京朝日新聞に書を寄せて、臺灣女子の風習を逑論せり。其要に曰く、臺灣女子は年齡四五才まで其家庭の待遇殆と男子と異なる處なく、其以上より初めて女子的待遇を受け、其足を緊着するとも同時に起る。また臺灣女子の大半は、實に憐むべき境遇を經過するを常として、即ち幼時に於て金錢を以て他人に賣り渡され、所謂媳婦となる。また臺灣女子の教育、夫の輔佐等には冷淡に、且つ纒足の結果、少しの勞働にも堪へず。たゞ僅に茶選、鷄豚の飼養をなすことあるのみ。

●また其性質　は即ち媳婦となりて、他人の手に育し、苛酷なる繼子育ちの境遇なれば、樣々なるひがみ、執拗の性を養成し、從って人に嫁しても、勢力夫を凌駕するものあり、然れどもまた耐忍力に富み、其手藝に巧みなるもこの性質によれり。

●また其德義の點に於ては、頗る劣等にして、表面のみ禮義に厚きの觀あるも、親子兄弟、夫婦の關係等親密ならず、また女子敗德の行爲甚だ多しとぞ。高木氏は、當路は凡てこの弊風を破壞するに勉め、また縣及び廳の所在地に女學校を設

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

立すべしと論ぜり。

◎民法草案と離婚　新小說の時報記者石橋忍月、民法草案の離婚條目を觀察して、夫若くは婦の姦通は共に離婚の原因と規定せり。然れども婦は單に姦通の事實あるのみに依りて離婚され、夫は姦通して且つ爲に刑に處せられたる時に非らざれば、婦より離婚を請求せらるゝを要せず。世に藝娼妓の存在する限は此の彼此の相違は到底排除せられざるべし、此邊は女學雜誌記者の一論に任せんといひ、又

◎姦通處刑の場合　に就いて夫が姦通して刑に處せらるゝの場合は殆ど皆無といふも可なり。其故は夫が他の有夫の婦に姦したる場合に初めて刑に處せらるゝなり。然れども是は親告罪なるが故に、他の夫より告訴せらるゝに非らざれば、罪を構成せず、女房の不貞くされは、ツマリ其夫の耻なるが故に一又告訴して姦夫を罪人となすの外一文の得にもならぬが故に一多くは內談で事濟みとなるなり。斯く見來れば、日本の夫なる者は、姦通御免といふも可なり。民法草案八百十二條第三項の規定は有らざるべからず、有つても格別効なきものなり。女學雜誌記者應に一論あらざるべからずといへり。

◎西村茂樹翁　嘗に鳥取に於て結婚は慾情の故に歸するの說をなすや、同地方人にして、これ翁が弘道會の主旨に反くものなりとして反對者するものあり。又此頃に至りても、鳥取市の新聞に結婚を論ずる投書見ゆることあり。

◉國民新聞の體育談中、女子の體育を論じて曰く、近時或は女子の體操を廢するものあり、理由を問へば曰く、彼等を生意氣ならしむ、曰く彼等を御轉婆ならしむるが故と、果して然る乎。昔しにありても我邦の婦人は或は薙刀、或は乘馬等を修め一端緩急あらば戰場に勇名を轟かしたるものありき、乍去彼等は淑德の婦人たるを失はず貞操の妻たるを妨げず、溫良なる女子たるを傷けざりき、今の體育女子を御轉婆ならしむるに非ず、昔の體育女子を靜淑ならしむるにも非らず、唯だ教育の良否如何に由るのみ、然るに妄りに罪を今日の體育に嫁し去るは亦た酷ならずや一と。

◎婦人慈善會に　望むとて、反省雜誌社の投書家一人は曰く、貴婦人の慈善會は、物價不當にしてよろしからず、これよりは彼等が一の勸工場の如きものを起して、年中開場し、其相當の價にて賣上げたる金高の利潤を以て慈善事業に充つべしといへり、

◎木村某の多妻論　日本主義の木村某が一夫多妻說の至愚執るに足らざるはいふまでもなきが、其說とする處の、何程馬鹿氣たるかは、左を見て知るべし、曰く今こゝに一夫あり一妻あり、而して他の一人の女其男子を戀ひ、其男子に是非とも愛せられんことを求め、若し其男子にして之を拒むときは死せんとする如き場合ありとせよ、人を死せしむるが天理なるか、人を生かしむるが天理なるか、吾人はこゝに人爲的に、一夫一婦の制を立てゝ、以て唯一の道德なりと稱し、以て人の眞情を拒み以て可憐の女子を死せしむることは天理なりと認むること能はざるなり。古來愚昧狹隘なる道德は實に多く人を苦しめ、人情を害し、甚しきはよく人を殺すものなり。此の如きの道德は殺人罪に宣告すべきものなり。見るべし此の如き場合に當ては人情上より一夫多妻を許すの必要あり又天理に適へることを。』之につきての信州南安曇郡の實見生なる人の本誌への投書中に曰く何ぞ外國を言はん我國現時の狀態は一夫一婦主義にして、之に叛き居るものあらば、是れ放蕩野郎のみ。何等の不埒漢ぞ我國の道德を引下げて、野蠻時代に歸らしめんとはする。木村氏の如き唯物連と神道と何の關係かある。氏には物質あるのみ、何ぞ神あらん、否人間とへもあらざるべし、斯の如き極愚論をば國民全體の產出と主張するは、馬を指して鹿と言ふの類か。嗚呼背進的思想を以て、此進取的國民に强んとす、其愚や及ぶべからず。

◎離婚三十回　を爲し遂げたるものは、北海道登別の某なる痴漢なり。近隣のものは其都度酒肴の饗に與るを樂しみに離緣を煽動し又仲裁を試む。

◎千葉縣　の議員候補者の妻、撰擧人に書を送りて、妾も夫の當選の爲、神佛に祈願を怠らず云々と。

◎結婚者壽命長し　伯林のドクトル、シュツルフは既婚者百二十五人未婚者七十五人に就て、餘命數を實驗せし結果結婚者は二倍餘長きことを左の如く證明せり。

種別	六十年	七十年	九十年
既婚者	四八	二七	九
未婚者	二二	一一	三

六十年七十年に達すれば結婚者の餘命は、二倍餘　して九十年に至れば、三倍となるなりと。

◎笑ひ方の差別　によりて其人の性質を知るを得ると云ふ。或る實驗者の云ふを聞くに左の如し、

(一)顏を少しく仰反つて笑ふ人は精神快活にして公明正大を喜び議論圭角を免れず(二)顏は少しく俯向く氣味にて笑聲の高からざる人は常に憂鬱の狀を呈し樂しんで又悲むものなり(三)口を大きく開き左右を見返り憚りなく笑ふ人は無邪氣なれども優柔不斷兎角愚案をなす終生苦樂平凡立身出世の望なし(四)口を細く開き咽喉にて聲を發し其聲の漏れざるが如く笑ふ人は膽識大にて學才兼備庸人にあらず(五)初め口を塞ぎつゝ笑ひ漸く聲を漏すこと高く人を尻目にし目はたきして笑ふ人は性質小才あり惡意多し小人のみと。

◎郵便物の不着　盜難、遺失、紛失、拋棄、隱匿等の事情によりて宛先へ届かざるものゝ數、年々に其數を增加し、特に近來に至りて、不着の多きことは、多く人の共に實驗する處なり。此際、差出者に於て認め充分の注意を加へ要用の手紙は書留にするか、又は、最初に寫しを取り置くべきことなり。

時報

◉婦人製品博覽會　婦人製品博覽會はいよ〳〵四月中豐國祭の際　京都に於て開設することに決したるが、同會にては、觀覽人一同に、京都仙洞御所御庭の拜觀許可ありたき儀出願の處此程宮內大臣より聽許ありたり。又同會にては、名譽總裁に、小松宮彰仁親王妃殿下を推戴せんとて、高崎同宮別當まで出願せしが、多分御聞届相成るべしとの事なり。また黑田、蜂須賀兩侯夫人等を名譽會員に推薦したり。

◎共立女子職業學校の學科增設　共立女子職業學校は卒業後教師となるべき志望を有するもの多きゆゑ、品行學力技術共教員たるに適したる女子には尙三ヶ月以上實地授業の練習をなしたる上、東京府より無試驗にて免許狀を得各地方の招聘に應じ現在就職するもの數十名の多きに至れり。然るに近來諸方よりの招聘殊に多く、從來の志願生のみにては其需要に應ずる能はざるを以て、更に裁縫教員養成科を設け、修業期を一ヶ年とし廣く志願者を募集し來る三月廿二日試驗の上廿五名を限り、入學を許すと云ふ又此度特に割烹科を設け修業期限は八ヶ月にして之を前後兩期に分ち每週二回有志の女子に教授する由。

◎備中高梁順正女學校　同校現今生徒の總數は百五十餘人にして、普通科を修むるもの五分の三、裁縫科五分の二割合にて、本年より昨年にかけて、生徒數頓に增加せり。當三月には普通科裁縫科合せて十八人の卒業生を出す都合なりとぞ、

◎尋常師範學校女子部設置　廣島縣尋常師範學校にては來る四月一日より女子部生徒を養成することに確定し、過日來同校準備委員の手に於て、募集規則其他女子部に關する諸般の規則を起草中なりとぞ。

◎三十歲の婦人學に志す　山梨縣東八代郡竹野原村藤卷知榮と云へる人の娘某(三十年)は、先頃某村より養子を迎へたるに不幸にして離緣となりしより、爾來獨身一生を送らんとし、過日同村私立某學舍に入り、專ら學問を修練しつゝありと。今の世に珍らしき婦人なりとて同村に評判高きよし。

◎伊東婦人會　靜岡縣田方郡伊東村第二回伊東婦人會は、去月十三日午后一時より同村玖須美の齊藤方に開き出席者六十餘名、會長園輝子の修身談及料理法の實驗談其他會員の講話又儀式の研究などありと。

◎看護婦養成の內議　內務省衛生局にては、此程より各府縣に通告して、知事をして看護婦養成に關する準則を指示せしめ、各郡をして、是によりて養成方法を設定せしめ、一切の經費は、郡費若しくは町村費の負擔となし、而して管內町村は、義務として一名以上の看護婦講習生を出さしむる事となさんとの內議ありて、目下松平臨時檢疫局事務官專ら之が調査に從事せる由にて、同事務官は滋賀縣下に於ける看護婦養成の方法を模範とせん事を望むといへり。滋賀縣にては明治二十八年以來郡費若しくは町村費を以て看護婦講習會を起し、卒業生は必らず義務として看護に從事せしむる事となしたるなりといふ。

◎佛教婦人會　越中八尾婦人教會は同地有志四人の女子の發起に成りて、昨年十二月十九日其發會式を擧げたり。發會當時の會員は特別會員七十名通常會員二百五十名に達し、且資本金は百圓に滿てりといふ。同會は每月第二の日曜日を以て會合し、演說講話を聽聞するものなりといふ。

◎泉南婦人教會の發會式　泉州岸和田の名望家、富豪家、篤志家等の發起に依て成立ちたる同會は去五日同地に於て發會式を擧げたり。參會者百四十餘名發起人讃井逸三氏發會の趣旨を述べ、會則を議決し　役員の選擧を爲し夫より奥田名古屋國風社長、大洲西本願寺執行長　高木宮城控訴院長其他より寄せたる祝文祝電を讀上げ、終て二川鋭男氏の衛生談田中松琴、背野龍兩氏の風琴合奏、講談師林家松鶴、同又橋の講談落語等あり頗る盛會なりしといふ。

◎淑德婦人教會　但馬國養父郡建屋村各宗寺同盟して標題の如き會を組織し、昨年七月二十日其發會の擧式を爲したるが、爾來會員二百名に達し、此程同村建興寺に於て第三回の法筵を開き、演說說教等あり盛んに法施を行ひたるが尙今後每月一回法筵を開く筈なりと。

◎越中高岡婦人會　前號佛教主義の婦人會表中に揭げたる高岡婦人會則ち會員殆ど藝娼妓を以て成れる奇妙の婦人會は先年戰役の際軍資を獻納したるの廉を以て此程其筋より木盃二個をたまはり、また會員は當時殆ど四百餘名に達せんとするぞ、

◎貞婦

山形縣西村山郡大谷村白田勝藏妻

渡邊はる

舅姑枕を雙べ病蓐に在るや寢食を忘れて看護す且夫を助けて家業を勵み貧困の間克く生計を支持し孝貞の道を盡すと爰に十有一年洵に奇特とす仍て其賞として金貳圓下賜候事

明治三十一年二月廿三日

山形縣知事正六位勳六等　押川則吉

◎孝女　山口縣吉敷郡東岐波村の赤貧者鈴川林二郎(五十一)の長女菊(二十)は、八歲の時母に先立れ、不具なる父に事へて孝養怠らず、夏の熱き日中も冬の寒き朝も厭はず、磯邊に流れ來れる藻鹽草を掻き集めて之れを近村の農家に賣り十年一日の如く怠ることなく、世に稀れなる孝女なりとて、此の程山口師範學校及び東岐波尋常高等學校の職員一同より金品を贈り厚く其孝を賞したりと。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

◎孝婦　山口縣阿武郡彦島村に植田長左工門妻イセは孝貞拔群のものなるを以て曾て縣知事は其奇特を賞して金圓を下賜する事二回に及べり。イセは天保七年十月二十日生にて資性溫厚正直齡廿歲にして、始めて長左工門の妻と嫁せしが其頃家政極めて貧困にして、家族甚だ多く夫長左衛門は癈疾に臑みて勞働する事能はざるに、可弱き婦人の腕にて、晝夜寢食を忘れ勞働至らざるなく、能く稼業を精勵し、且つ舅姑に事へて一意孝養を怠らず、先年舅死亡して今は姑マス（九十一才）あるが倍々孝を厚うして倦まず、又義甥に市五郎（五十一年）と云ふ盲目あるが、愛憐實子も啻ならず、能く貧困の家計を理めて其の志操を變ぜず、精勵撓むなく玆に四十年間一家十五人の口を糊して稍々餘裕あるに至り、其孝貞は近縣第一と稱すぞと。

◎忠僕　石川縣珠洲郡大崎村字高屋谷要次郎は明治五年以來矢部三次郎の雇人となり、爾來廿五年恪勤怠らず、由つて石川縣知事其忠實を賞して、金五圓を賜ふ。

◎善行　三河國碧海郡長瀬村報恩寺住職結城清壽氏（三十二）幼時父母に孝養を盡し、爾來弟妹を撫育し浮屠社會に稀なる善行に對し、愛知縣知事より賞嗣を受けたり。

◎忠勤　博多市藏本町六番地の乾物店は早良郡姪の濱町石橋善次郎氏の支店なるが、同店を擔當せる石橋伊右衛門及び手代石橋清一郎の兩人は、去る安政五年開店の砌より本年に至る迄、四十一ヶ年間篤實に勤め少しも怠る事なかりしかば、店も之れが爲めに次第に繁昌せるより、町内の人々は大に其篤行に感じ、少年の良き手本なればとて、去る廿四日午後一時より東公園皆松館に同人を招待し、盛んなる宴會を開き席上にて銀杯に嘉賞文を添へて忠勤を賞したりと。

◎三代の孝子　豆州田方郡西浦村字木負大沼彦右衛門の長男彦太郎（十五）は、父の鮮魚を好むより魚屋の持ち來るものは鮮しからずとて、如何に浪高き日にても暇を見て鮮魚を釣り來り、父の喜ぶを見て此上なき樂とする由なるが、其父彦右衛門も亦孝心深く、其父存生中は一年中の父の飲料を一時に買ひ置き每夜父の舌皷打つを見て此上なき樂となし、其又父の彦兵衛といふも亦た孝行の譽れ高く、曾て韮山縣廳より賞與金を得たるとありたりといふ。

◎孝子　德島縣板野郡鳴門村大字三ッ石村福田長太郎は孝行の故を以て同縣知事より褒賞を受けたり。

◎貞婦孝女孝子忠僕美談　以上に擧げたる孝女貞節の男女の美談の外、なほ近日の諸新聞に見えたる此等に關する、美談多し。今左に編者の認め得たる限りを列記す。

孝女神戸柏町二丁目二百七十番大阪竹藏養女ケイの孝跡（東京日々新聞三月六日）◎孝女巖手縣巖手郡西山村林崎某長女アサ（岩手日報二月廿日）◎節婦義の爲に投身せんとす（新潟市自由新聞二月廿六、七、日）◎孝子順孫長崎縣東彼杵郡早岐村小字川向草場トク（長崎新報二月十七日）◎孝行者岡山市浦戸町方谷屋村山平九郎（山陽新報二月廿五日）◉感ずべき婦女福島縣石城郡赤井村松本某妹モト（福島新聞二月二十四日）◉孝子遂に罪を犯す（富山日報二月廿一日）◎感心な婦人山口縣玖珂郡柿井田村引土タキ（長岡日報二月廿四日）◎貞女長崎縣南松浦郡岐宿村字阿彌陀前亡三藤房松妻スミ（鎭西日報二月廿四日）◎孝女の龜鑑岡山縣西西條郡二宮村三浦甚吉妻イト（岡山日報二月二十五日）◎孝行者土佐國土佐郡江の口村山崎小作孫スエ（十一年）（土陽新聞二月廿五日）◎忠僕長州馬關大字壇之浦町河瀬守吉（岡山日報二月廿日）◎少女の遺言馬關文關小學校生徒福尾オク（東京日々新聞三月四日）

◎女學生の不始末談　以上多くの美談に反して、此頃ボツ〲女學生の不始末談見ゆ、例へば◎當世娘氣質（報知新聞二月廿六日）◎女學生の万引（東京朝日新聞三月七日）

◎特許裁縫機　多年の工夫を以て之を發明し、去廿六年農商務省の專賣特許を得爾來一層の改良を加へ、京橋區木挽町四丁目七番地吉見鐵工場内に製造所を設け改良技師太田喜太郎氏の監督に依りて目下製造中なる特許裁縫機は、其効用西洋ミシン縫と違ひ從來我國の手縫ひと同一にして絹布類には絹針を用ひ木綿類に木綿針を用ひ、其運針の方圓は自由にして縫目は緻密なり。且使用法は頗る簡便にして、熟不熟練を問はず、何人にても右の機械一臺を使用せば、一日平均絹綿入なれば十枚以上を縫上げられ尤も蒲團夜具蚊帳蝙蝠傘シヤツ木綿袋等を縫ふこと容易なり。構造は一尺立方位にして西洋ミシンの如く輕便なりとぞ。今般主務者河野憲明氏は京橋區内適當の場所に販賣本店を設け、各府縣に特約販賣店を置き廣く販路を擴張する計畫にて其代價一個九圓五十錢なりといふ。

（東京朝日新聞）

◎海　外　女　界

◎女子鐵道會社長　米國のアンニー、クライン、リカート夫人といへるは、兼て採破者資本家として有名にして、既に十六年間坑山業に從事し、地方公共事業進歩の爲めに既に熱心なるが、此程カリフォルニアなるトーラムに鐵道布設に從事せり。同會社の會計主務者はブレイナード孃といへるものにして、其外六人の事務員もまた悉く婦人なりといふ。

◎英國婦人の内職　ロンドンに婦人職業協會なるものあり。同會は現に四百有餘の貧女をして、十六種の内職をなさしめ、之に賃金を與ふ。其職業別は、蝙蝠傘毛皮むしり、裁縫、シヤツ縫、厚紙箱張、刷子製造、マッチ箱張、頸飾り、打毬及テニス毬、念珠玉及編もの、長靴及半靴、鋼着せ、人形製造、袋製造、造花、婦人及小兒衣服等なりといふ。

統計集誌

每月一回發兌
定價金貳拾五錢

第二百號目次（三十一年二月廿五日）

日本の出生（大日本國勢問答の十五）…………河合利安
職業調査の必要に就て…………相原重政
大學々生ノ視力統計…………呉文聰
第一回露國人口調査…………田中太郎
全國人口年齡別（明治廿九年十二月三十一日調）…………成井光太郎
全國公立小學校教員年齡別（明治廿九年調）…………横山雅男
帝國森林原野統計（承前）…………武市翁壽
火災及海上保險會社（明治三十年三月三十一日）…………鈴木敬治
横濱港輸出入（明治三十年十二月）…………横濱稅關
各國蒸氣力概算…………伊東祐穀
北米合衆國國債表（自七十年度至九十六年度）…………高橋二郎
北米合衆國及加奈太地方製茶輸入表…………依田昌言
雜記

●入會者●東京統計協會總會及舊正副會長慰勞會●統計學社例會●統計事務擴張●各省年報の紙數●各省廳の統計主任●民勢學會の參列員●新兵教育の程度●農事統計の調査●輸出入の集散統計●陸軍文部兩省統計主任の更迭●貨幣流通高●政府紙幣及銀行紙幣流通高●金貨制後正貨の消長●貨幣鑄造及渡高●全國株式會社●全國各種銀行現立調●東京市の米麥相場●東京府下の在留外國人●全國諸學校の卒業者●帝國圖書館年報●水產統計調査●年報諸表用紙の送付●北海道麥產額●佛國農民の數●韓國戶口●佛國の人口●濠太剌拉西亞の人口●歐洲諸國の陸軍費●各國電話統計●世界の汽船及帆船●各國の郵便及電信收入●米國紐育婦人の職業●新刊報告書

發行所　東京市京橋區山城町六番地　東京統計協會

山葉製造保險附風琴定價改正廣告

	定價	荷作費
第壹號形	金拾六圓五拾錢	金六拾錢
第貳號形	同 金廿六圓五拾錢	金八拾錢
第三號形	同 金參拾七圓	金壹圓貳拾錢
第四號形	同 金四拾參圓	同
第五號形	同 金四拾八圓	金壹圓參拾錢
第六號形	同 金五拾五圓	同
第七號形	同 金六拾五圓	金壹圓五拾錢
第八號形	同 金七拾五圓	金壹圓六拾錢
第九號形	同 金百圓	金參圓
第十號形	同 金百貳拾圓	同
第十一號形	同 金百五拾圓	同

鈴木製造ヴワイオリン定價改正廣告

ヴワイオリン一號品　定價金五圓
同　二號品　同　金七圓
同　三號品　同　金八圓
弓一號品　定價金壹圓
同二號品　同　金壹圓五拾錢
同三號品　同　金貳圓
箱一號品　定價金壹圓五拾錢
同二號品　同　金貳圓
同三號品　同　金貳圓五拾錢
以上ハ弓箱共附屬ス
定價　金拾五圓　金貳拾圓　金貳拾五圓　金參拾圓
二分ノ一、四分ノ三ヴワイオリンハ並ヴワイオリント同代價ニ御座候

風琴用椅子改正定價表

小形定價金壹圓參拾錢中形金壹圓五拾錢大形金壹圓七拾錢
東京市京橋區竹川町十三番地
電話本局五百二十九番
共益商社

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

明治女學校義捐金募集告白

明治女學校は、今を距る十又四年前、島田三郎、田口卯吉、木村熊二、巖本善治等が、發起創立せしものなり。時に、民間未だ私設獨行の女學校あるなく、但だ外國傳道會社の管理に係るものありしのみ。同志切りに之を遺憾とし、深く國躰に基づき、兼て日進文化の學術に適應せる、私立の女學校あらんことを熱望し、大隈伯、澁澤榮一君、其他　朝野諸名士の協贊を得て　創建せり。爾來、十四年、孜々　育英に盡力し、前後、入門生、一千五百名に超ゆ。此を以て、精神次第に貫徹し、校友四方に起り、將に擴張の機を決して天下に請ふ所あらんとする時　圖らざりき、去々年二月、隣家火を失し、校舍悉皆類燒に罹り、十年の苦心、一朝烏有に歸せり。於此乎　天下同情の士、呼ばずして應じ、奮つて義捐寄捨せらるるもの、太はだ多し、就中、紡績會社數百の工女、相約して、其賃金の貯蓄を寄附せらるるあり。有志婦人、四方に訴へて、一大慈善市を開かるるあり。甚しきは、結髮を廢して、其費を寄せらるるも　若くは、食を斷つて、汗血の喜捨を寄せらるるものあり　感慨眞とに禁じがたし。如斯して、合計金六千圓を得、外に、勝海舟先生の武道道場、大隈伯の鐘樓、アリスミラー孃の外國教師館、ハーツフォルン孃發起紀念館、鈴木眞一氏の教場一室　文學音樂會の音樂教場一室、中川嘉兵衛氏の懸想室、等の建築預約を得たり。此に於て、災後一周年を期とし、東京府下北豐島郡巣鴨村に、校地五千六百坪、建家（二階造西洋館及日本家）一百二十坪を得たり。偏へに是れ、天下仁人非常の慈惠による。今にして、吾校は　啻に劣らざるの隆盛を復するを得たる也

因て熟ら思ふに、今の時は、則ち昔時に異る。各府縣高等女學校新たに起り、四方到る處に、女子の普通教育あり。形勢竟も十四年前の寂寥たるに似ず。蓋し、女子普通教育の器關は、略ぼ具備せりと云ふべし。夫れ、明治女學校の初て起り、爾來天下仁俠の士の協贊を辱くせる所以のものは、自から特種の趣意あるべし。若し、四方普ねく供給し得る通常容易の盡力にして止まば、必らずや恐る、熱情同感の知己に孤負せん。故に、知る。今や更に一段の難を冒し、當に一步進向の責務に任ずべき機會に立てりと

之を以て、明治女學校第二期の教育方針として　今後將來に盡力すべきは、一に、有限若干名の女生に特種の普通教育を施すこと、二に、高等教育の課程を漸次に擴張し、他日女子大學の地位に到達せしめんこと、是れ也。其一、特種の普通教育とは、家庭及脩己の鍛練に重きを置くべき普通教育にして、生徒多數の女學校に於て施こしがたきものなり。其二、高等教育は、十年前來既に施授したるものなれども　今後更に擴張し、彼の高等女學校卒業後の有志をして、遺憾なく學修せしむべき科程を具へんことを望むにあり。

夫れ其の如き二箇の希望は、今の時に於て尙ほ稀有に屬す。只管らに、仁俠の士の贊助を仰ぐにあらざれば、遂行極めて難し　則ち廣く校友を募り、着々方針を進め、步々堅實の基礎を置えて、敢て退轉せざるの進步を了せんことを期す。玆に初て擴張の途に上らんことを決定し、先づ基本金三万圓の義捐を各地方の有志に請はんとする也。仰ぎ願くは、天下博愛義俠の仁士、仔細に吾校多年の精神を吟味せられ、幸に同情を寄せ、惠然として贊助の恩を施こし玉へと云ふ。

明治三十一年二月

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

故若松賤子女史譯述

再版

小公子

全一冊洋裝美本
紙數三百五十頁
正價金三十五錢
郵稅八錢

近代歐米の讀書社界を震動し、劇場に演せらるゝと數十百回、一代の流行を左右して一時年少の子をして悉皆小公子の如くならしめしと云ふは、此書原本奇代の勢力なり。純潔無邪氣、天使の如き一少年は、頑陋執拗の老侯爵を感化し、德に憐あり、母に佳人あり、貧しきを憐み、小作者を愛撫し、言行惣て甘露慈雨の如し、讀去り讀來るうち讀者亦自から化せらるるを覺ゆ、何ぞ其の可憐高潔なるや　少年固より讀まざる可らず、婦女老人亦讀まざる可らず。賤子女史曩に其前篇を譯して世に公にするや、譯文の巧妙を以て亦た一時に喧傳す。森田思軒居士之を以て明治年間譯文の最上乘のものとし、激賞措かず、曾て其第一頁を見て忽ち驚き、一夜通讀、曉に徹し遂に卷を棄る能はざりしと云へり。然るに女史其後篇を公にするに及ばずして不幸長逝し、知人愛惜の情を寄せらるること切なり。即ち茲に其遺稿を收め、女史が一周忌日に會せんとして前後二篇を合せ刊行せしむ。其友湘煙中島女史は序を題し、鄉友松井昇氏は密畫を附せり、同好の士、希くは一讀を賜へ。

出版元　東京日本橋區本町三丁目　博文館

大賣捌　東京巢鴨村庚申塚　女學雜誌社

故若松賤子英文集

巖本嘉志子

一冊正價金六十錢
郵稅金六錢

小公子の譯者故若松賤子の英文述作に於けるや筆路頗る流麗なるを以て稱せらる。今此書は即ち女史が英文廿一篇を收めたるものにして、加ふるに女史の師友ブース氏及其他內外知友記する處の女史の小傳追憶記等を以てし、また女史の肖像を掲く。蓋し以て內外家庭の團欒の友となすべく、又以て尋常中學高等女學校等の英語敎科書となすに良好なりとす。

發賣所　東京巢鴨村庚申塚　女學雜誌社

『巖本嘉志子』に對する批評

故若松女史が紀念にと、女史が英文の遺稿を集めて、其內外の知己及び其人巖本氏の發行せしものなり。その文字の簡明にして好く選ばれたる、高雅にして然かもなづまざる、流麗清新の文まことに Queen's English の純なるものに耻ぢず。神田氏、頭本氏など今の英文士として知られたる人々の筆に成るものより、遙に自然にして生々したる心地す。否本國の女流と雖も、此文を成すもの蓋し多しとするに足るべきか。孤女學院を訪ふの紀の最初のあたり、少しく日本人が詩的形容の流弊に失したる憾みあれど、皇后陛下、皇太子殿下の御事を記し奉るの文字などめでたく覺ゆ。こし方行末と題せる終りの一文、又一つの書簡に函館難船の事を記せるもの最も筆力を見る。女子教育と基督新教とは最も深く女史が心に印せし如くに思はる。この有爲にして清新の思想を抱くの女史、早く故人となりてこの遺集をなす、これを惜しむもの、豈に其知己朋友のみならんや。

（文學界第四十七號「明治二十九年十一月三十日」）

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

明治廿五年三月十五日遞信省認可

(四六八一)

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY